MANTE

漫画の手帖

1981 AUTUMN 5号

ぼくらの夢と、限りなき偏愛をこめて——

アニメ美少女年代記

よいこのうわさ

横山光輝の作家性と初期作品 ● 中路秀夫

古書店ガイド

情報交換コーナー

150YEN

よいこのうわさ・うわさのよいこ

某プロで小松左京の「さよならジュピター」をアニメ化する計画があって、松本零士さんが小松氏にキャラクター・デザインをさせて欲しいと申し込んだところ、みごとに断わられたそうです。松本さんの美少女キャラは小松氏の好みじゃないのかな。

ルパン三世・死の翼アルバトロスでとらわれの不二子ちゃんがスッポンポンの下半身に巻いていたテーブルクロスをとってルパンに合図する場面があったでしょう。ある女性アニメーターが「女はあんなことしません」と演出の宮崎駿氏に言ったところ「君には女の気持ちがわからんのか」と言い返されたとか。

その宮崎さん、こんど愛車を前のシトロエン2CV（赤）から同じシトロエン2CVの白に買いかえました。東京の交通渋滞の素ですね、いずれにしても…。

女にゃ女の気持ちは、わからんさ?!

前回ちょっとだけふれたぱふの復刊号・ふゅーじょんぷろだくと（舌かみそー）が6月の中ばに出た。ぱふ rulrun 8の名称はいろいろ問題あって使えず、すでに刷り上ってた表紙がすべてパァになったとのこと。なにはともあれスポンサーもついてめでたしめでたし（かな?）でも、あと書きが載ってて持田氏をてってー的に悪者にした文章が書いてある。当事者があそこまで書くのはどーしたもんだろーねえ。そもそも持田氏にぱふの社長をやらしてたのが可部氏＝オ谷さんなんだものね。持田氏を食わすために全国誌にしたんだって迷宮78のインタビューでも答えてるし…。

ある情報誌の編集者にはウチワモメの事は書かんで欲しいと言いつつ持田氏の悪口をところかまわず言いふらしてるのはオ谷さんだし…どーもよく解らんのだよ。

清彗社のほうからも、ぱふの最終号がふゅーじょんと並行して出るということだったがどーなることやら。

カット・鈴木信一

漫画の手帖は、神田神保町の高岡書店、中野書店、早稲田の現代マンガ図書館、奈良のあすか漫画図書館、中野のマンダラケ、調布の曼都離夜、大阪深江のもっきり屋書店その他で取扱っております。

ご遠方の方、確実に入手なさりたい方には直接購読をおすすめします。ご住所お名前を書いて、3回分の購読料500円を現金または小替為で事務局あてお送り下さい。500円札をふつうの封書に入れて送る時は、外から見て現金が入ってる事がわからないようにお願いします。何号から欲しいのか必ず書いて下さい。

バックナンバーは4号のみあります。

どーぞ　よろしく

事務局　〒167 東京都杉並区上荻2-27-18 藤本孝人 方

僕等の夢と、限りなき
偏愛をこめて——

アニメ美少女年代記

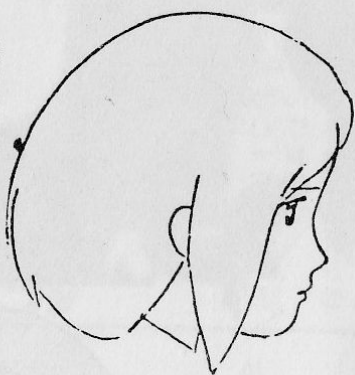
企画・原案・製作・総指揮

佐野邦彦

『この一冊によって少年少女達が、何が正しく
本物なのか確信する力添えになれば幸いです』

協　力・STAFF

荒金正明・岩本保雄・大竹幸一郎・佐々良平・冨田秦彦・藤井泰・佐野邦彦
Mr.ペンギン・中央大学アニメーション研究会・中央大学現代風俗研究会

東映動画の美少女キャラ達

岩本保雄

これはある映画監督の話しだが、作品の出来、不出来は大部分がキャスティングによるのだそうだ。大部分というのはともかくとして、キャスティングが作品において重要なポイントを占めるということは、否む事のできない事実だと思う。

というのも監督にとって作品は、一つの〈世界〉になって欲しいものであるから、俳優にもその世界にうまくとけ込むような能力を要求する。ただ、そんな俳優は少ないし、既製のイメージを持たれている者も多いからできるだけ真っ白な俳優を探したりする。世にいう新人起用というやつがそれだ。

アニメーションにもキャスティングはある。性格設定、キャラクターデザインというのがそれにあたるが、こちらは新人起用どころか新人発生だから並の映画とは少し違う。

従って、映像作品におけるキャラクターの位置が重要であればあるほど、それを創作できるというアニメーションの性質は、実写よりも大きく監督の意図を作品に反映させることが可能になってくるわけである。

では、キャラクターはどのようにして創られるのだろうか。本文では主に性格についてとりあげるが、少なくとも以下のことがポイントとなる。

A　性格付け――――（感覚）
B　デザイン――┐（視覚）
C　アニメート―┘
D　声――――┐（聴覚）
E　音楽―――┘

これらは、いずれも等しく重要なのだが、主として性格付けが中心になるのが普通だろう。

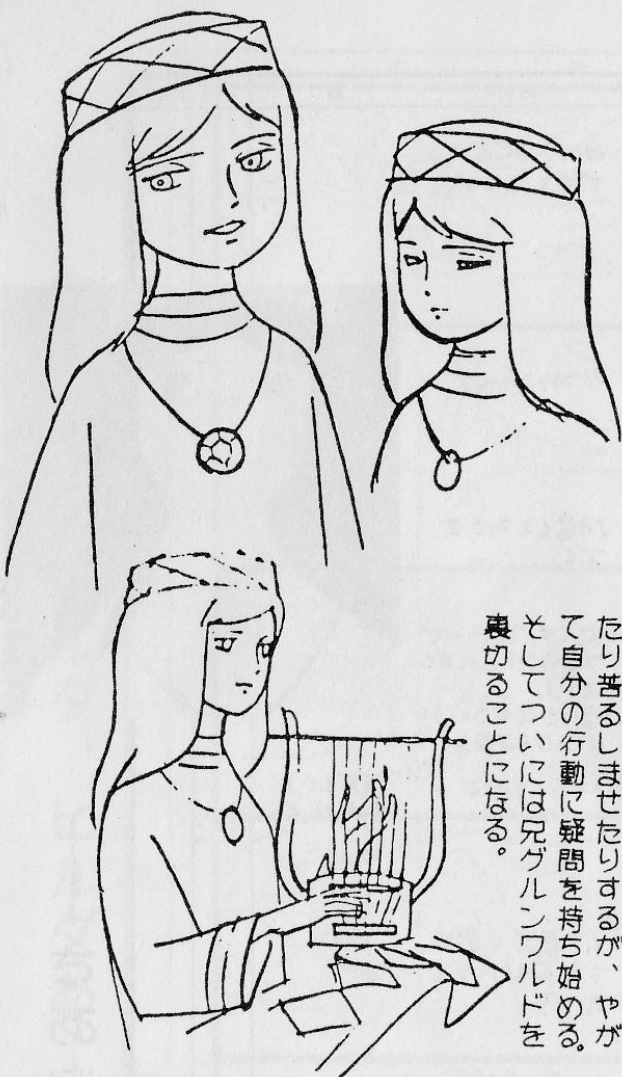
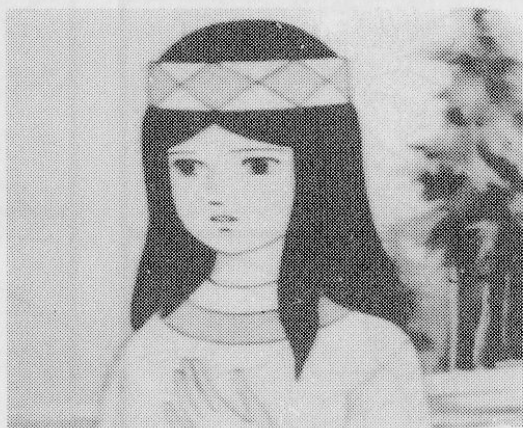
アニメーションが日本に伝えられた正確な年代は定かではない。しかし、戦前において映像詩として、かなりの完成度を有していたのは確かである。

だが、戦後になると映像詩としてのアニメーションはほとんど姿を消し、映画としてのアニメーションがその主流となる。

その中心となったのが戦後間もなく創設された東映動画であり、ここが主流となり得たのは一つには、東映とい会社の子会社であるということ。また、映画のキャラクターとなることにたえ得るキャラクターを生み出せるアニメーターを有していたことがあるだろう。

ともかく、現状のアニメーションの基調は東映動画をその端としてよいはずである。

★人間の不幸をしょって生きるのね。

哀しい少女・ヒルダ

さて、いよいよ本題に入り東映動画の美少女達に触れていきたいと思う。以下は年代順に追うとして、まず別格としてヒルダ（原画・森康二）について書いてみたい。というのも、東映動画作品群中、彼女は最も描かれたキャラクターとして定評があるからだ。

「太陽の王子・ホルスの大冒険」は、日本のアニメーション史上屈指の名作といわれているが、ヒルダは作品中主人公ホルスと対立する悪魔グルンワルドの妹として登場する。彼女はグルンワルドの命により、ホルスや村人達を迷わせたり苦るしませたりするが、やがて自分の行動に疑問を持ち始める。そしてついには兄グルンワルドを裏切ることになる。

彼女のこの心の動きは作品中、実に重要な位置を占め、彼女こそこの作品の本当の主人公だといっても過言ではないだろう。確かに表面上の主人公はホルスなのだが、彼の役割は〈団結〉という作品のテーマを示すだけだ。

御存知の方もあろうが、このテーマと当時の製作状況から、このアニメーションをプロレタリアものと嫌う人がいる。事実ストーリーを追う限りそういう面も多い。しかし、ヒルダの動きを追うことによって、それを断定することができなくなるはずだし、彼女抜きには作品も成り立たないはずだ。

誰かが、映画というのは建築だと言っていたが、この作品の場合確かにテーマは大切なパイルだ。しかしそれだけで立っていても建築とはいえない。

さて、ヒルダに関しては今までもいろいろ言われてきたが、一致するのはその魅力の一つに〈かげりがある〉ということだ。

どうしてだろう、どうして彼女にはかげりがあるのだろうか。

筆者は、彼女が理想主義者だったのではないかと思っている。ホルスも、グルンワルドも。そして三者三様に考え方はちがうのだ。

ヒルダは、改心したという。そうだろうか？　いや、彼女はずっと変ってはいないはずだ。ホルスは、今までに何人もいただろうホルスの一人にすぎないだろうし、村人達は彼女にとって嫌悪の対象でしかない。作品中には彼女を変える要素など存在しないのだ。

しかし、ここで注目しなければいけないのはマウニの存在である。マウニはヒルダにとって鏡なのではあるまいか。

シナリオの図式上では、ヒルダは当初人間を嫌うと言う点で、グルンワルドの側にいる。しかしここでは、それ以前、つまりなぜ人間を嫌いになったかという説明がない。これは後にホルスへの科白で登場するのだが、この点が重要だ。つまりヒルダのマウニとの接し方と科白の内容との明らかな違いは、ヒルダが実は、人間が嫌いなのではないことを証明している。いや、彼女は人間が好きであるがゆえに、人間の愚かさを嫌っているのである。しかも彼女自身はそれに気付いていない。マウニという〈人間〉を見守ることで、初めてそれを自覚するのだ。ここにおいて彼女はグルンワルドから離れることになる訳だが、そのことは、彼女から一時的にかげりを消している。ただ、これはあくまでも一時的にすぎない。というのもそのかげりの原因が、ヒルダ自身の煩悶である以上に、人間そのものにあるからだ。

だから、もし作品に続きがあったとしたら、彼女には村を去る以外に道はあるまい。やはり彼女は哀しい少女なのだ。

——さあお行き、あたしの命の珠をかけて！

ああっ！ヒルダ、ヒルダあ——

S	C	画面	キャメラワーク・その他	内容	TIME
85	8			コロがゆっくりと空にひきあげられていく。（ヒルダ眼で追う） おそう雪狼 ヒルダすばやく立ってたたきおる。	6.5
	9			カメラ前下から大きくFr.inし、上空へ遠ざかるコロ、フレップ受けいて	2.5
	10				3.5
85	11				3.5
	12			見送っていたヒルダ、眼をとじる。 おそう雪狼 無抵抗	3.0
	13		T.B	ファン T.B ヒルダ、雪狼におそわれて体がかしぎゆるやかに倒れる。 たちまちヒルダをおおいつくす雪狼	3.0

妖婉な少女・白娘

さてここからは、東映動画の美少女達を年代順にとりあげてみよう。

　まずは「白蛇伝」の白娘（原画・岡部一彦）この東映動画初の長編はどうも子供向きとは思えない。大ラブストーリーなのだ。白娘は東映動画シリーズ中でも、最もなまめかしいキャラクターなのではないだろうか。

　しかし肉感のないアニメーションの特性で、いやらしさはない。ディズニーにも、またヨーロッパのスタジオにもない味を出すことに成功したといえよう。作品はカラー・スタンダードだった。

　次につくられたのが「少年猿飛佐助」。美少女としては佐助の姉おゆう（原画・大工原章？）真田幸村とのラブシーンが役どころだ。雰囲気は、当時の時代劇そのままである。この作品からおなじみの東映スコープになる。

　そして「西遊記」人間ではないが美少女猿の橉々（原画・森康二？）が登場。作者の手塚治虫は、その殺害を企てるが失敗。見事、東映調ハッピーエンドを迎える。

殺された少女・安寿

しかし第四作にきて、ついに一人の美少女が劇中ばにして殺される。「安寿と厨子王丸」の安寿がそれだ。（原画・森康二）

　創始より、かならずラブシーンを入れ、ハッピーエンドを目指してきた東映動画作品中稀れな悲劇の美少女である。（と言っても原作があれではしかたがないが…）

　キャラクターのモデル及びライヴや声まで担当したのが、あの佐久間良子だった。ちなみに彼女は白娘のライヴがそのデビュー作だったそうである。

サミールのためのシンドバット

　そして初の西洋ものとして「アラビアンナイト・シンドバットの冒険」この作品は、はっきり言って波とサミール姫（原画・大江原章？）以外に見るべきものはないようだ。サミールはシリーズ中でも屈指の美人だろう。ハイティーン位の年頃だから、ファンになってもロリコンと言われずにすむはず。ただし、シンドバットと完全にくっつくので、最後の二三分は見ない方が健康のため。

逃げて！クシナダ

続いて登場するのが「わんぱく王子の大蛇退治」この作品は、東映動画第一次黄金期の頂点であると共に、日本アニメーション界の一つの看板でもある。

作品中の美少女といえば、クシナダ姫（原画・森康二）がいる。この作品のキャラクター達は、他の作品とは違った独特のデフォルメをされている。

日本のキャラクターは線が少ないが、それは完璧なデフォルメによる理想的なもので、見た目と違って描きにくいのは衆知の通りだが、この作品ではそれに形象的な要素を加えることに成功している。

森康二のキャラクターは、あれだけ流布しているにもかかわらずこの作品に限っては今だ追随者がいない。

クシナダは主に後半に登場するが、おびえているシーンや、逃げだすシーンに人気があるようだ。サディストに人気があるのだろうか。

★美少女はいじめるほど味がでます？

宝石の瞳を持つ少女

その後「わんわん忠臣蔵」では灯台の少女（原画・大工原章？）が出るだけで、美少女はいない。

そしてその次が日本初のSF長編アニメーション「ガリバーの宇宙旅行」である。

この作品では、紫の王女（原画・宮崎駿　）が美少女だ。ほとんど人形のカラをかぶって登場するため、実際の素顔が見えるのはラスト近くになってからだが、寒風の中で瞳が宝石のように輝くのが印象的だ。

あと、中性になるのだろうがキューピット（原画・森康二？）が出てくる。ツーンツーンと宇宙を行く姿が快い。評判はよくなかったようだが一見をおすすめする。

その後「少年ジャックと魔法使い」ではキキ（原画・大工原章）これも評価は今一つだったが、美術と音楽は良い。ただキキを始め、キャラクターはあまりかわいくない。ともかく雰囲気だけは独特なものがあった。

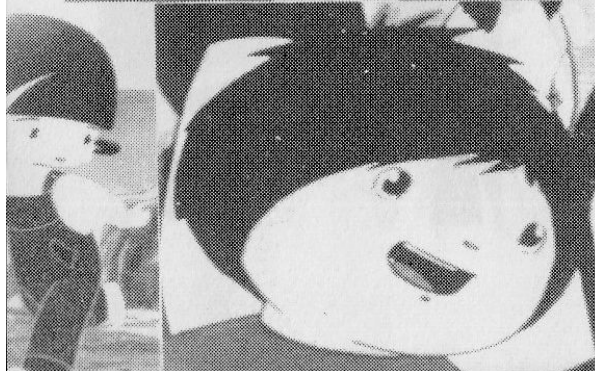
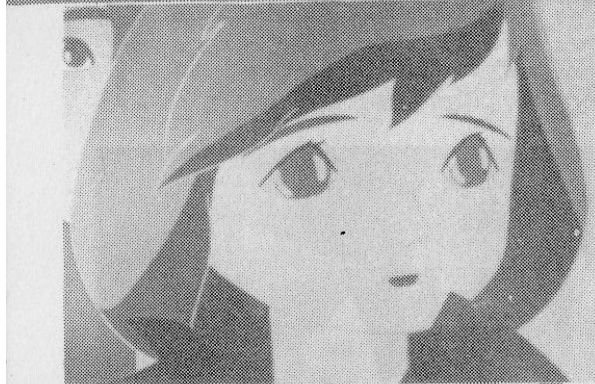
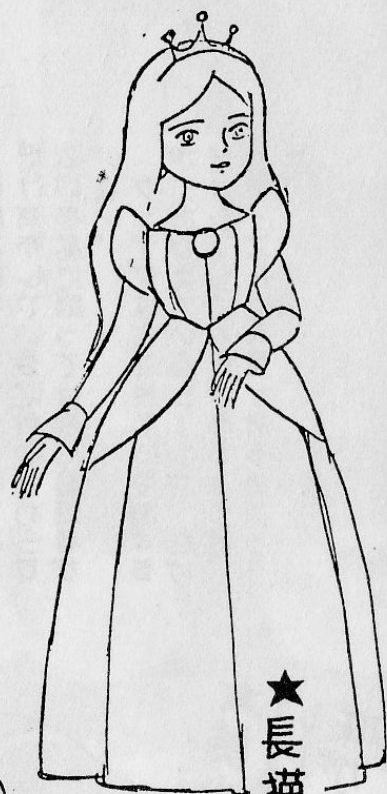
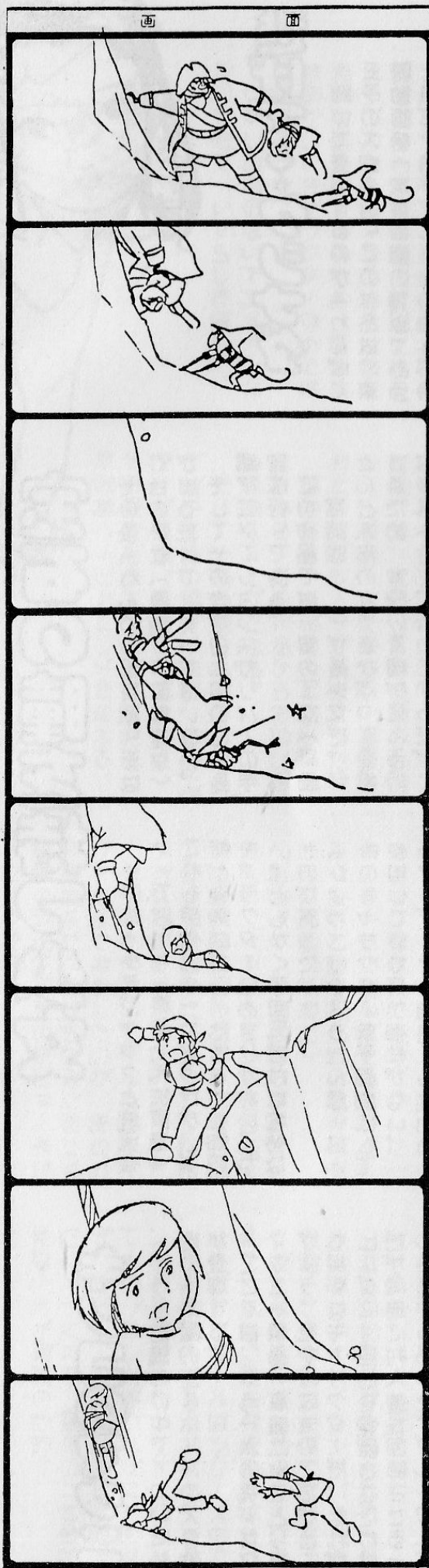
「ひょっこりひょうたん島」は人形のキャラクターを平面的にして使用していて何か個性がない。「アンデルセン物語」も既知のキャラクターを出しただけ、特におもしろくもない。ただ本格的なミュージカル仕立てにはなっている。ラブシーン同様、ミュージカルシーンも東映動画おなじみの顔だが〈本格的にあつかった〉という点ではおもしろい作品である。

キノコのマウニ

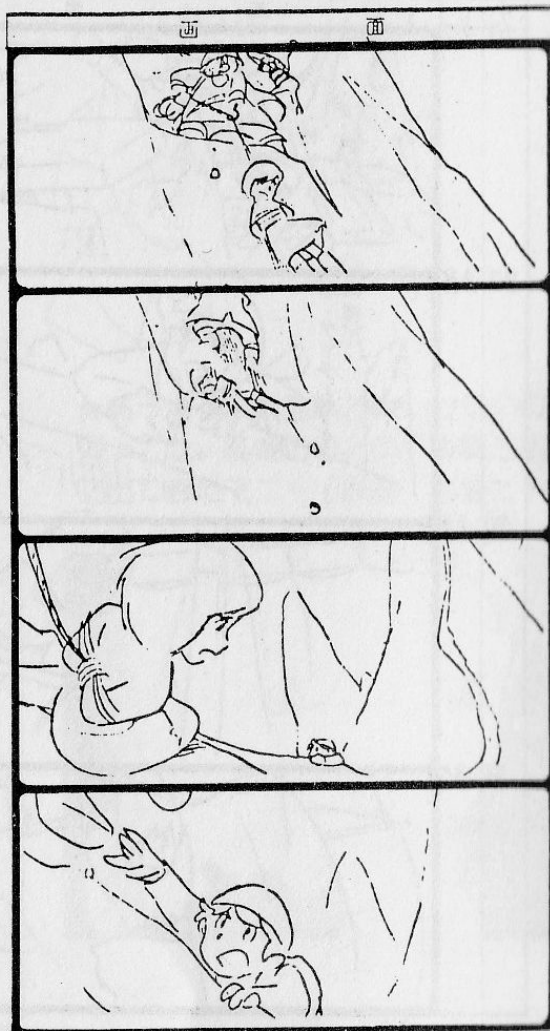
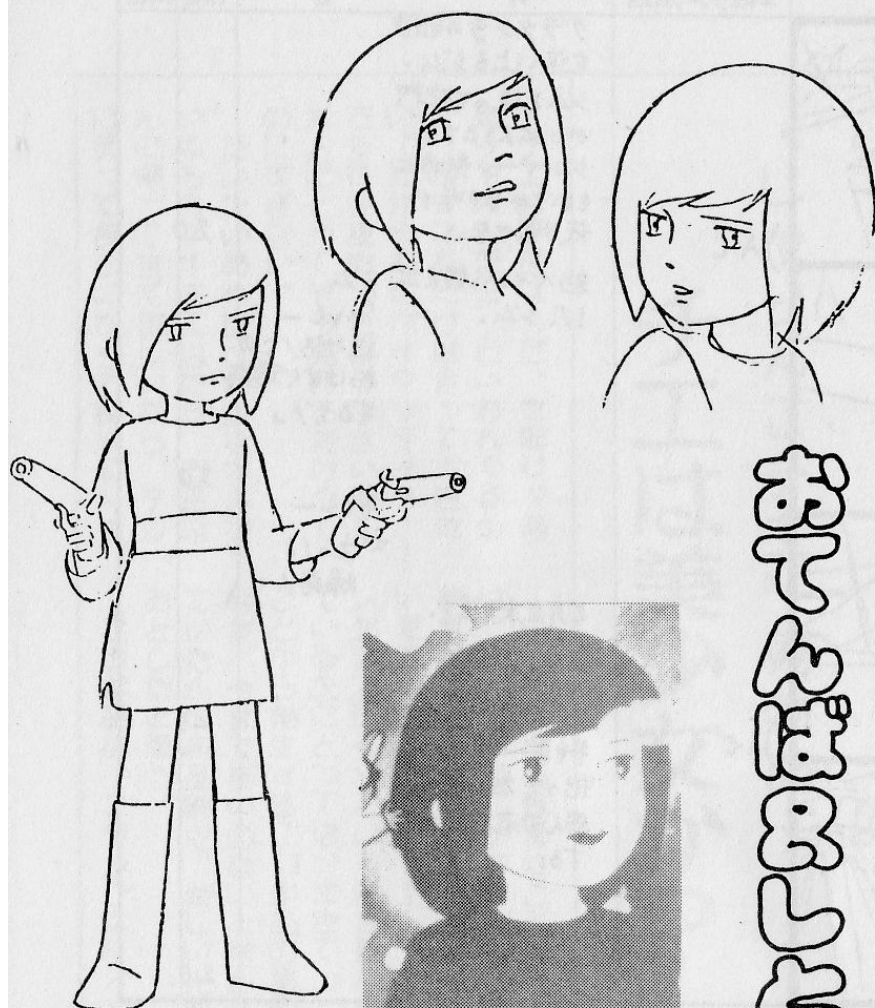
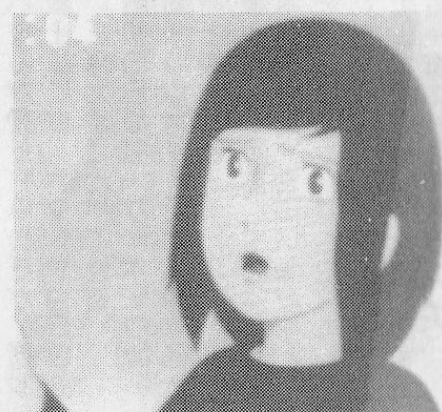
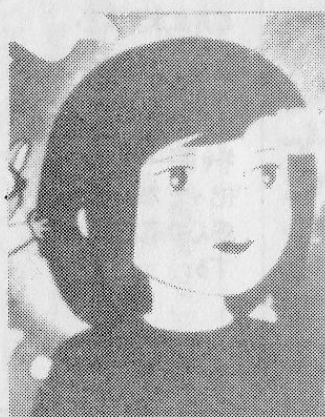
そうした流れの中で、ついに前述の「太陽の王子ホルスの大冒険」が登場する。

ここでは、もう一人の美少女？マウニ（原画・森康二）をとりあげよう。見かけはきのこだがとても純粋なキャラクターだ。それがヒルダに、自己を覚醒させたわけだが同時に村人達を団結させる一つの要でもあった。グルンワルドの前に逃亡を始める村人達に、彼女は素朴な疑問をなげかける。

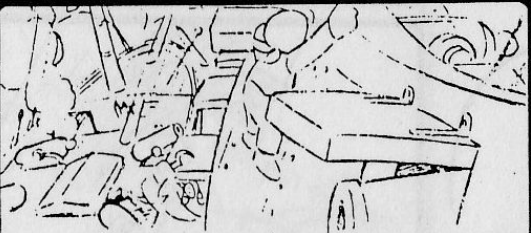
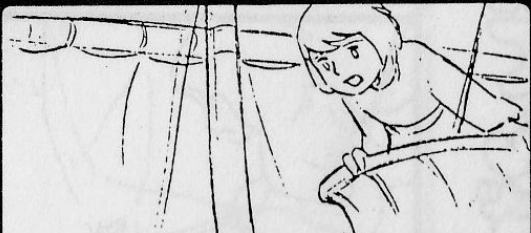
「逃げたらどうなるの？」

ヒルダがホルスに言った科白と、立場こそ違え内容は同じであることに注意。

★長猫は、カリオストロの原形なのだ！

朝日よ・ローザ

この頃が最盛期だった東映動画のスタッフは、続けてもう一本の名作「長靴をはいた猫」を生み出す。ヒロインは言わずと知れた、大ちゅきな大ちゅきなローザ（原画・森康二）♡♡♡♡♡♡♡♡♡ラブシーンも多く、まさにおとぎ話といった作品。「カリオストロの城」の一つの原形とされているが、もちろんクラリスとは違う。よりお姫さまなのだ。歩くときはドレスの裾をちゃんとあげるし、ピエール危うし！といっても、彼女には何もできない。（しかし倒れる塔で、悲鳴もあげず、しっかりピエールの胸中にいるところはさすがなのです）次作「ちびっ子レミと名犬カピ」は美少女が出てこないので、パス。

おてんば＆しとやか・キャシー

いよいよ「どうぶつ宝島」だ。当時、TVにおけるアニメーションの進出や会社内のイザコザで、かなり分散してしまったスタッフの、それでも、この底力！といった痛快な作品である。

ここで登場するのがキャシー（原画・森康二）海賊フリントの孫だけあって、強い、強い！ 両手にピストルを持って大暴れなのだが、ときおりふと見せる女らしさが、かわいい。

後の「カリオストロの城」のクラリスと違って、もともと強いのが少しかわっているが、ちらっと見せる女らしさ、また、強さ、と演出の基調は同じものだ。

復活のあや

しかし「どうぶつ宝島」を最後に、東映動画の長編群は、一応の終末を迎える。主なスタッフは四散し、長編をつくり続けはしたものの、設定、製作期間は少なくなる一方、社内スタッフの力不足では、良い作品は望み得なかった。

だが、それでも継続していたおかげで、ついにかつての東映動画はよみがえった。「龍の子太郎」がそれである。

出てくる美少女は、あや（原画・小田部羊一？）無口であり、太郎の旅への導入というわずかな役割だが、彼女はまさしく東映動画の娘だった。

黄金期のB級作品

以上、東映動画長編の作品群の他に、B級(60分以下)でも良い作品はあった。ただ、これらは原作者(ほとんどマンガが原作)の力の強く働いた作品として、A級群(60分以上)とは別な進化をたどったようである。つまり作り方は〈まんが祭り〉なのだが、素材企画としては、ヤマトや999に近いと考えることができる。

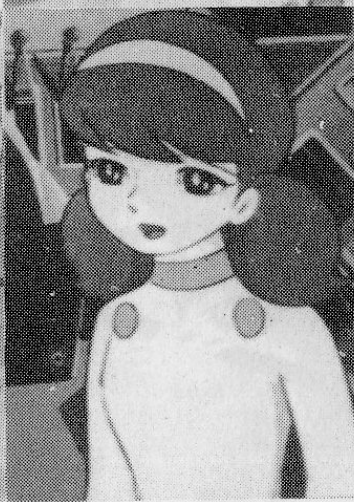
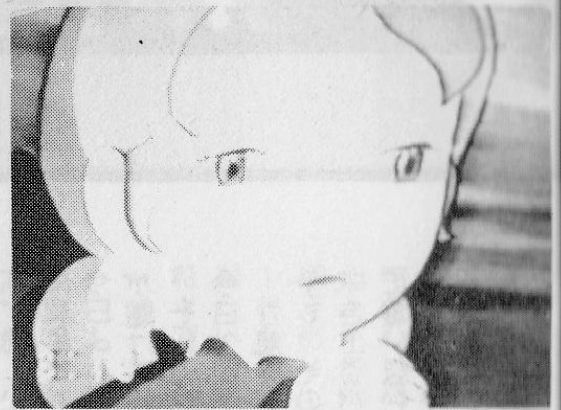
最初のB級は「サイボーグ009」「同・怪獣戦争」で、A級作品と同時上映された。

美少女としては、003(原画・木村圭一郎)当時の彼女は、もっと明るかったしすねたりもしてみせた。

そして、ヘレナ(原画・木村圭一郎)彼女も東映動画としては死んでしまうめずらしい人で、かわいそう。おかげで演出の芹川有吾は、美少女いじめの芹川と一部のファンの間では言われるようになってしまった。

次の「空飛ぶゆうれい船」はA級並みの作品で、美少女としては、少女(原画・小田部羊一?)がいる。後半出ずっぱりなのに、なぜか名前がない。ストーリー上はなんのかかわりもないのだが、勇ましい娘で、いるだけで楽しい。

そして「海底三万マイル」美少女としてはエンジェル(原画?)海底国の王女さまで、きまぐれな娘だった。

このシリーズは後に劇場用マジンガーとなり、ヤマトで本格的な

★あっもう一人忘れちゃいけないのが残ってた。長猫のあとの「長靴三銃士」に出てきたアニー（原画・森康二）

そして今までとは違ったアニメーションへと移っていく。

かなりはしょって書いた点はごかんべんいただきたい。

主として性格について取りあげたのでヒルダに枚数をさくことにした。ただ、鑑賞者と製作者の立場は違っているという点は御留意いただきたい。筆者は、製作側の意図と違うと思っても、あえて自分の受けた通りに書いている。

これは正しい事と思う。が、批判は大いに受け付けます。製作者側の意図をすべて受けとれるようになりたいですね。お互いに。

デザインの点から見たい人は、東映動画の作品がライヴアクションを使わずに、実写に近い動きをめざした、という点に留意すればいいだろう。特に、ライヴを多用しているディズニー等と比べればおもしろいと思う。

★文中敬称は略しました。

『じゃりんこチエ』見物記
チエは美少女か？

チエは子供なのだ。世間じゃあありゃ大人だヨ、といわれてるので、まずこれだけは言っておきたい。だからあのバイタリティも、さも世を皮肉ったような言い草も、大人にとってそう見えるだけのものにすぎない。

だいたいあれだけ素直な大人がいるものか！チエはただ、お母はんに帰ってきて欲しいから、テツに笑って欲しいから行動するんや。

最も尊敬する監督にこう言うのは、まことにおこがましいが、実際高畑勲にとってこの作品は新しい世界だと思う。〈生きていく〉という事を重視している氏にとっては、生きていくことから発生するこの作品の喜劇性が、今まで笑いのないと言われていた氏の作品群に、新しい光をおとしたと思う。

この作品は、スラップスティックではなく、寅さんのような最も難かしいギャグものであった。それはホルスや三千里のように、ラストがハッピーだから救われるのでも、ハイジのようにキャラクターが明るいからでもない。作品そのものが楽しく、生きていく上での喜劇性を生かした作品なのだ。盛り上りを二つ（遊園地と小鉄ジュニアの決闘）にわけてしまったのが残念な気もするけど、つなぎをギャグにしたり、背景動画を使ったり、技法的にも変化を求めたようで、ファンとしてはたいへん楽しい作品だった。

では、はたしてチエは美少女なのか？こんな質問は、テツにどつかれる素と思うのだが、小鉄が「チエちゃ～ん、その顔は危険や～男がうるさいど～」と言ってるし、誰もが美人と認めるヨシ江はんに似ている（笑い顔を除いて）などから言って、まちがいなく美人である！（ただ、おバアはんも若いころはチエそっくりだった、という点に一抹の不安は残る）

しかし私個人としては誰がなんといおうと美少女だと思う。特にアニメでは、横顔など、ほとんど乱れた顔は見せなかった。

そして自主アニメの時代へ——

ター無情の物語

■冨田泰彦

「太陽の王子ホルスの大冒険」と「長靴をはいた猫」が、東映動画長編アニメーションの双璧を成すということに、異論のある方はまず居らんと思うし、またその作品については岩本君が充分述べてくれたことと思うのだけれど、それらの〈周辺〉について、担当外の私があえて追記する事をお許し願います。

●太陽の王子／60年代の青春

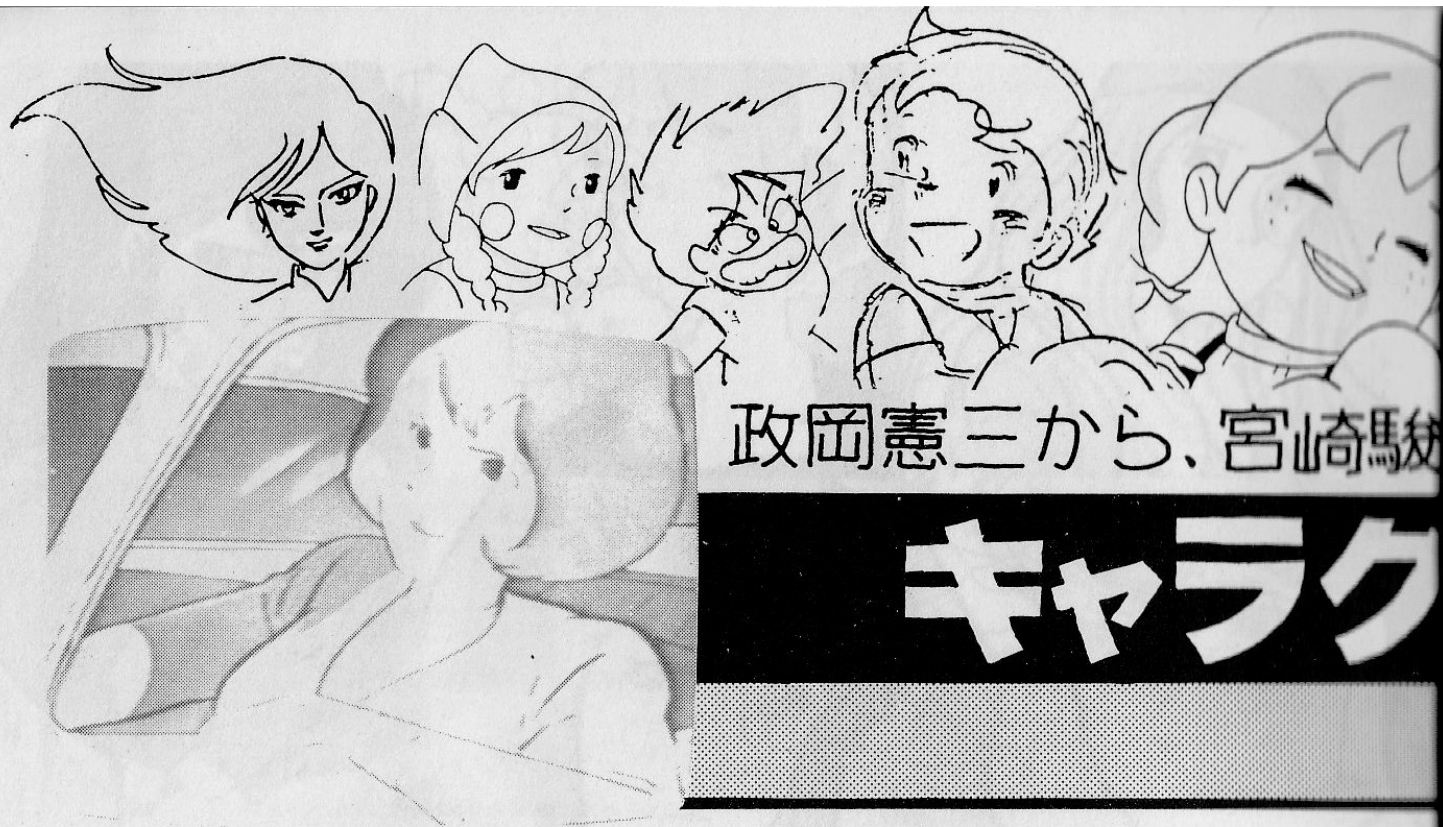
「太陽の王子」と「長猫」が生み出された時代、一九六〇年代後半。それは日本にも、日本の人々にとっても大きな転期であった高度経済成長期。冷蔵庫、炊飯器、テレビ等がアレヨアレヨという間に家庭内に侵透し、海のむこうからの電波がお茶の間に映像を結び、月の裏側の写真なんぞが見られ、人間が宇宙を泳ぎ、月へいどみ、他惑星へと探査機がとぶ。激しい技術革新が社会に、家庭にと確実に反影されて行き、昨日より今日は豊かに、今日より明日はより豊かに。素晴らしい社会が開けて行くと、誰もが信じていた時代。

そして、その明日を信ずる心を持つが故に、今日への不満をかくすことなく、人々のパワーが爆発し得た熱き時代。安保斗争も東大紛争も、その明日への希望・期待あってこその、吹き上るパワーの発露としての行動であったに違いない。

現在でも、東映動画の古くからのスタッフ達が「太陽の王子」の名を口にする時、その口調は、あるいは重く沈み、あるいは誇に満ち溢れるのです。

TVの侵透の結果としての映画館への客足の低下その他の理由から、会社が長編作品への、合理化という名の〈手抜き〉を要求し、様々な圧力を加えた時に、当時のスタッフ及び労働組合がそれにたち向い、斗い抜いた結果として生れたのが「太陽の王子」であり、そしてそのスタッフ達の、パワーの充実から生れたものが「長猫」です。

「太陽の王子」の名に、今も続く激しい労働争議〈有文社「日本アニメーション映画史」及び映産労「あにめれぽーと」参照〉を思う人もありましょう。しかし同時に、様々の迷いの中から団結の力を知り信じ、氷の悪魔にたち向うホルスと村人達の姿は、アニドウ・コナン本の中で富沢女史が述べているように、当時のスタッフにとっても、そして当時劇場で感涙にむせんだ観客にとっても、まさに、〈60年代の青春〉そのものであるのです。

現在の狂乱アニメブームの中で様々な書籍が出版されており、またアニメ年表の如きものもよく見かける様になりましたが、その年表を見て、奇妙な点に気付かれないでしょうか。アトムから初まり、宇宙もの、ロボットものに至るSFアニメオンパレードの中で、サイボーク009から海のトリトンに至るまでの約三年半の間、SFアニメの全く存在しない

不思議な空白期があるのです。

更に言うなら、円谷プロの第一期ウルトラシリーズの終局が第一期SFアニメブーム（アトム以降）の終局期にほぼ一致し、SFアニメ空白期は少年漫画衰退前の最後の光の時期であり、第二期SFアニメブーム（トリトン以降）のその前後の時期こそ、少女漫画の新しい波の胎動期でもあった…？ほんとかね！書けと言うから書いたけど、自分でも半ば信じられんのよSさん！ま、もう書いちゃったんだからいいか…この前後の時期というのが、確かに、何かの大きな転期に当っているのは確かなんだし…。

趣味走っていい事を条件に引き受けたこの原稿、趣味の「太陽の王子」スタッフ―高畑勲、宮崎駿、大塚康生―等がかかわった作品を中心に、しばらくこの線で書かせていただきますか…。

●昭和元禄とヒーローの死

さて、第一期SFアニメブーム最後の、というよりその残党であるサイボーク009は、昭和43年の作品。円谷プロ空想特撮シリーズも、ウルトラセブンから怪奇大作戦への交代期。SFヒーローは何故消えたのか。この時期にいったい何があったのだろうか。

この時期、米ソの宇宙開発競争もアポロ計画の進行で一応の結着がつき、日本は世界一の経済成長率でGNPオ二位、数字の上だけなれどアメリカに次ぐ豊かな国となっていた。

既に太陽の王子追記の所で述べた通り、六〇年代のパワーの源泉は、明日への希望・希待だった。しかし、そのより素晴らしい社会への希待感というものが、豊かになった現実の社会に行き当たった時、どのようになるのだろうか。

豊かな日本。学生運動も、東大紛争を最後に急速にそのパワーを失って行き、その残党も目標の統一を失して、内ゲバに終始するようになる。人々は豊かな生活を享受し、その風潮にEXPO70、日本万国博覧会の国家的一大御祭り騒ぎが拍車をかけた。いわゆる「昭和元禄」の到来である。

希望と行動こそをその存在のより所とするヒーロー達は、それらが現実の享楽の中へ埋没してしまった時代、昭和元禄の中で斗い続けること、生き延びる事はできなかったのだ。

やがて少年漫画誌上でも、星飛雄馬は父の影を越えようとして投手生命を失い、タイガーマスクも伊達直人として不慮の事故で死んで行く。矢吹丈もまた、最後の勝利を得ずして静かに燃え尽きて行く。

今にして思えば、己の目指すものを勝ち取った最後の男、力石徹のファンによる葬儀は、六〇年代ヒーローへの、最後の別れの儀式だったのかもしれない。

アニメファンならずとも御存知、旧作の「

ルパン三世」がブラウン管に登場したのが、そんな昭和元禄の真ったただ中、昭和46年のことだった。

全23本のうち15本を、高畑勲と宮崎駿が共同演出している。作画監督は言うまでもなく大塚康生。

再三の再放映とその度の高視聴率は、あの無意味的痴呆的厘介的空前絶後之大駄作新ルパン三世を生んだ程だから、漫画の手帖読者ともなれば当然見ておいでの筈、今さらストーリーの説明の要はないだろう。

しかし、放映当初のあまりの低視聴率＋再放映時の馬鹿人気等から、その登場時期が早過ぎたと評する向きもあるが、それが当らんことはスタッフ自ら述べている通りである。御大層な主義主張も持ち合わせず、盗みの為の盗み、プレイの為のプレイ、今この時の、生きる事の享楽のみを追い求めて走り回る人間達の一大喜劇。これが昭和元禄という時代の申し子でなくして、なんだというのだ！

しかしその、目的よりも手段・行動を楽しんでいるかの如きルパンは、時として、己が自由であり、自由を愛するが故の、内からの真剣な行動を見せる。第21話「ジャジャ馬娘を助け出せ」のドタバタ珍道中の中での、牧田リエの環境的・内面的開放の物語。第11話「七番目の橋が落ちる時」の、ルパンを操るが為に可憐な少女リーサを人質にした者への押さえようのない怒り。手錠のかかった不自由な手で、ただ一度、そのワルサーから放たれる殺意を込めた一弾は、ルパンの内に秘められた、生きる事への真剣さの証しであるのかもしれません。

そして更に、ルパンの愛した女、超エネルギーを秘める花、第三の太陽と共に消えゆく美女リンダのエピソード（第3話「さらば愛しき魔女」等を）へ何か∨を求めながらも座折した六〇年代というものの影として見てしまうのは、あまりにもかんぐり過ぎた見方だろうか。

●華麗なる時代の子／ルパン

翌昭和47年、演出・高畑勲、脚本・場面設定・宮崎駿、作画監督・大塚康生、小田部羊一の例の三人組に太陽の王子原画の小田部を加えたスタッフの、33分の中編「パンダコパンダ」が登場。ゴジラにくっついて東宝系で上映された作品で、スタッフはルパンと同じでも内容は一変したホノボノ調。

竹やぶの中の一軒屋に住むミミ子ちゃんは、親はないけど元気な子。ある日突然ミミ子のおうちにパンダの父子がやってきて、ミミ子は母のないコパンダのお母さんになり、パパンダにミミ子のお父さんになってもらい？？こうして書くとできの悪いお伽噺のようだがいやこれが実に傑作なのだ。真ッ白のクッションへというより饅頭だナ）の如く丸まるコパンダのギャグを初めとして、パパンダの巨

大さとオトボケ、不条理ギャグの連続に、パンダの素性とミミ子との触れ合いでホロリとさせる名演技。スペクタクル(?)もしっかり用意、果てにラスト近くのオチが最高！

全編を自然と人間の調和した郊外に舞台し（きたあきつ、と駅に書いてある。秋津ならあるんだけど…）善意の人達しか登場しないこの好編、翌年に「パンダコパンダ・雨ふりサーカスの巻」という続編を生んでいる。

機会があったら相方合せ、ぜひごらんいただきたい作品。

パンダコパンダ公開の時、既に昭和元禄は終っていた。果てし無いかと思われた高度成長経済と共に、ドルショックと石油ショックのダブルパンチであっさり崩壊し去っていたのだ。手の平を返したような暗い未来論の横行と、公害問題の噴出。これはそれまで一部のものに過ぎなかったテクノロジー社会への反発と、高度経済成長期に失ったものへの見直しを、社会として見つめ、考えることを余儀なくするものだった。

その風潮の中で人間の内なる暖かさを描いた作品が、前述のパンダコパンダと見ることもできるだろう。

この、六〇年代というもの、またその中で見失なったものへの見直しという社会思想の変革が、他にも多くのたいへん重要な動きを呼ぶことになる。

昭和元禄以来そのパワーを失ない、混迷する少年漫画最後のきらめき、永井豪の「デビルマン」

そして漫画を読んで育ち、六〇年代に若き青春を過した、新漫画世代とでも言うべき若手達が、りぼん誌上で新たな胎動を見せ、別冊少女コミックではより静かに、萩尾・竹宮をはじめとする新人達が独自の世界を築いて行く。人間の行動よりも、その人間自身を見つめる新たな視点。この時期こそ、作品としての漫画の完成期だったのかもしれない。

そして人間を見つめる手段としてのSFアニメの復活「海のトリトン」その構成法と思想性は〝てれびまんが〟からの脱脚を目指したものとして、未熟ながらも一応の評価はできる。

その後を受けるように登場した「科学忍者隊ガッチャマン」は、当初、ジャリ向け勧善懲悪破壊願望代理充足アニメとしてスタートしながらも、次第に斗いの中での一個としての人間の苦脳を描く方へと向ったのも、その時代風潮故だろうか。それはその後のタツノコSFアニメ群、「新造人間キャシャーン」「宇宙の騎士テッカマン」等に受け継がれて行くことになる。

何やら書き綴るうちに自分でも訳が解からなくなってきて、もうラスト近くは支離滅裂！うっ！今思えばよーするに、映像作品も漫画も時代の子って、ただそれだけの事だなァ。うー、過ぎたことはいいっ！ とにかく先に進もう。あとはもう現代作品、時代的位置付けは今後の課題、全部まとめて書いちゃえるから楽なもの…かな？？？

●アニメドラマの女の子達

昭和49年「アルプスの少女ハイジ」51年「母をたずねて三千里」は前段の如き人間回帰指向強まる中に登場。演出・高畑勲、画面設定・宮崎駿、作画監督・小田部洋一（三千里のみ小田部の奥さん奥山令子がお手つだいに加わっている。）

内容の説明はしない。知ってて見ん奴は馬鹿者。不幸にして今だ見る機会を得ぬ人には、次の機会に是非ご覧いただく事が一番である。とにかく様々な意味でのエポックメーカー。説明ではない言葉としての台詞を話す、ストーリー運びの道具にならぬパーソナリティを持った登場人物達が、創り物の舞台ではないがっちりと構築された世界の中で、様々に感情を交錯させ合う。多分に映画的とも言えるおっそろしく優れた作品。もともと長編出身のスタッフでもあり、全52話の大長編アニメーション映画と見るのが妥当なところ。

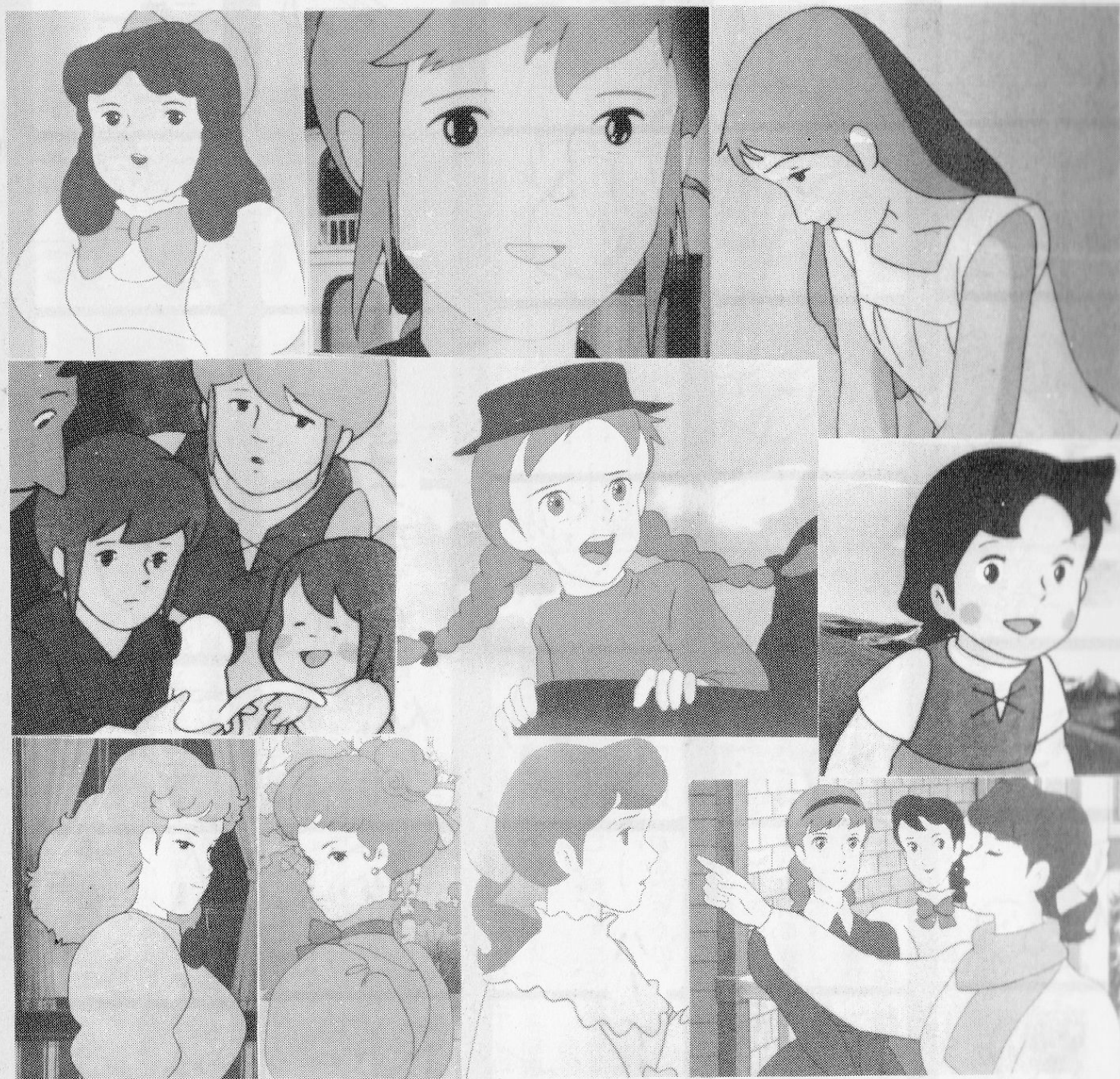
しかしそのような方法論を採ることは、一面、お茶の間でセンベイをかじりながらでも、料理をしながらでも見ることができるというTVのある意味でのメリットを棄て、視聴者に小さなブラウン管に神経を集中することを要求し、更にアニメ映画の〈漫画的特性〉をも完全に放棄する事をも意味していた。

子供がついて来れるかという懸念を余所にこれら番組がカルピスタイムという確固たる高視聴率枠を築き上げたということは、その人間関係重視の大河ドラマが、時の社会風潮の中に受容され得、融け込み得たという事だろう。

だが、そのドラマ創りにも一つの大きな穴があった。一つの〈原作小説〉を元にして、一年間放映を続けるドラマを構築するという、演出以前の、企画段階でのその方向性が、アニメ化に当っても原作のストーリィ骨子を変えることはならぬ、という〈枷〉にもなり得るということだ。

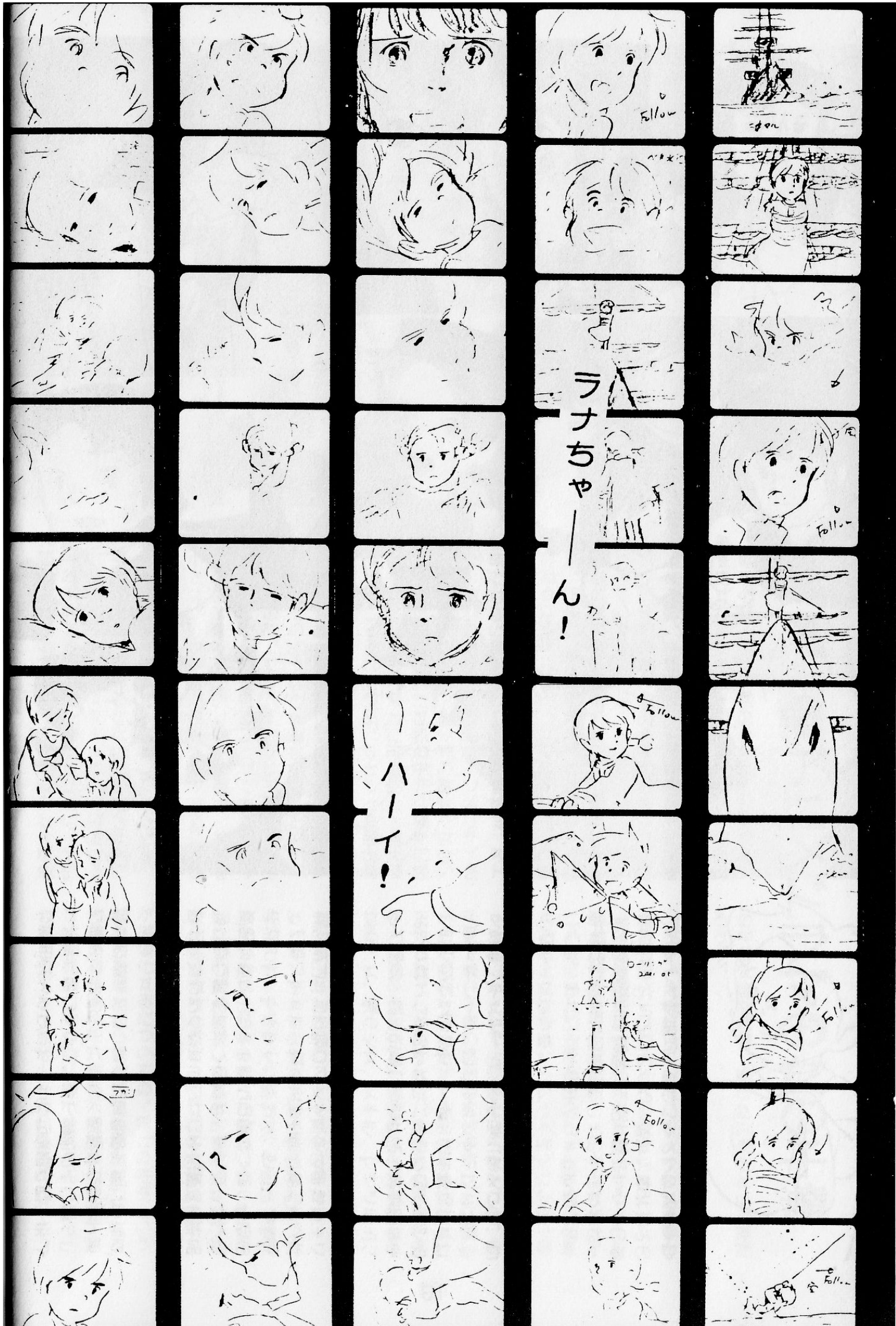
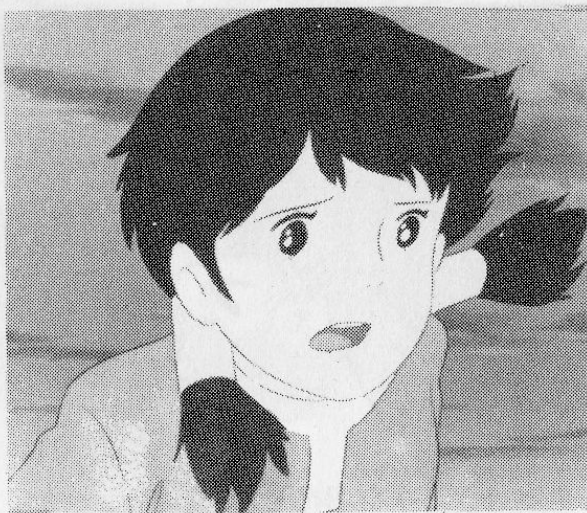
それはハイジでは問題にならなかった。三千里では、子供の異国の旅が予想以上に酷しいものになりはしたが、作品は見事な仕上りを見せた。しかしそれは、高畑勲の同枠次回作「赤毛のアン」で一気に表面化することになる。

昭和54年「赤毛のアン」原作は御存知L・M・モンゴメリの少女文学の傑作である。そのストーリーの多くの部分は、多感な（過感な？）少女の日常の断片を子細に渡って描写したものだ。しかし文章による子細な描写を映像に置き換えるについての各方法論のギャップ。さらに、女性の描いた少女像を、男性が映像化するについての、男女の性差という絶対的な違いから来る感覚の相違が、アニメ化の上での到命的な消化不良（消化不能？）を招く結果となった。

「赤毛のアン」スタート時の悪評はこのよう

な理由によるのだが、それは企画の罪、決して高畑の罪じゃない。彼が書き込みの薄かった原作終盤を、十八番の人間関係に沿って膨ませた後半部は、まさに圧巻の一語に尽きる。

えー、ついでに言いますと、高畑ほどの名演出家がただひたすらに女の子を描いた作品は、他に類例を見んのです。アンについての克明な描写と他キャラとの関わりは、アンのみならず、ダイアナ、ルビー、ジェーンといった準レギュラー達を生き生きと描いてくれましたし、はてはロレッタ、リリージョーンズ、ミニーメイ、プリシー、ミニー・アンドリュース、駅の少女、ステラ、プリシラといった端役・超端役達にもちゃんと存在感を与えてくれているのです。ハイジではハイジとクララだけでしたが、丁度、三千里のマルコとフィオリーフ、コンチェッタ、ジュリエッタ等準レギュラーと、フアナ、アメリア、セバーリョスといった端役達との関係と同じようなケースですね。

いやーそれにしてもアンのキャラはいい！作監の近藤喜文さん、乗っとったんですね～あ、画面設定の宮崎は15話で逃げて、その後桜井美千代さんに代っとります。桜井さんのレイアウトがまた、かわい～んですよ～～♡

ラナちゃーん！
ハーイ！

●恐怖！ハンバード・宮崎

さて、今、ロリコンブーム、それがアニメブームと合体して、こうした企画がたてられたわけだ。

現実の少女に比べ、あまりに実体の薄いアニメの少女達も、確かな技術の裏付けによる豊かな表情と、人格と、ふさわしい確かな世界を与えられた時、それを見る者の内に生き生きと存在を始める。その内なる少女達の姿に、自己の理想の少女像を投影しつつ見る者達が、あわれな平面フェティシスト達、アニメキャラ・ロリコンなのだろうか。

しかし、もしロリコン男がアニメを製作する立場に居ったら…。

恐ろしい事にそれが居るのだ！その名は宮崎駿！東映長編に加わり、高畑と共にTV作品にもかかわった縁の下の力持ち。

その息のかかったと思われるキャラクターは多い。古くは紫の星の王女に始まり、ヒルダ、ローザ、キャシー、リーサ、牧田リエ、ハイジ、ミミ子、クララ、フィオリーナ、そして後述の宮崎演出・監督作品のラナ、クラリス、小山田真希！ひとつのロリコンアイドルキャラクターの歴史そのものである。高畑単独演出作品では比較的その影響は弱いのかもしれんが、ミミ子はモロだし、キャシーに始まりラナの髪の毛、小山田真希の服色のコスチュームも興味深い。峰不二子が後半ショートカットになった事も宮崎の趣味故と言われる。

そんな宮崎が単独演出をした作品は大変だ！優しく可愛く芯が強くて純粋で、呼べばハイと答えてついてくる。男の想い描くひとつの理想の少女像を、そのまんま映像化してしまう！

宮崎駿の最初の演出作品が、昭和53年の全26話のTVシリーズ「未来少年コナン」作画監督は大塚康生。前述のラナが登場した作品である。

宮崎演出は、高畑の人間描写の影響を色濃く受け継ぎながらも、その上に大ボラを吹きまくりつつ、暗い原作を創りかえ、スピーディな「漫画映画」に仕立てて行く。

理想の少年コナン、憧れの少女ラナ。彼等の内に己の失なったものを見出し、暗い過去から開放され行くもう一人のヒルダ、モンスリィ。彼女を初めとするこの大冒険活劇の登場人物達は、次々と開放されて行く。(但し、救いようのないのは殺される。)それはドラマの底流に流れる宮崎の、憧れの人間賛歌故か。ヒコーキファン感涙の飛行艇ファルコ。メカマニア驚愕の超巨人機ギガント。書きたい事は尽きぬが、思い入れが深過ぎてまともにゃ書けんし、見た者にはこんな駄文は不要の筈。見てない奴は馬鹿者。機会が云々言っても、ビデオ取った奴はゴマンと居るのだから、見せて貰わんほうが悪いのだア！

●哀しき夢追人／ルパン

コナンの後宮崎は、赤毛のアンの場面設定を手がけるも、逃亡。またも大塚と組んで、劇場用長編「ルパン三世・カリオストロの城」の演出をする。昭和54年も暮の公開。

作品は間違いなく近年の長編動画映画の最高峰！昔のルパンスタッフが手がけた作品故TV版旧作の雰囲気を期待した人も居たようだが、当然のこと登場したのは、時代を経、齢を重ねた中年ルパンだった。

しかし作品内容は現代的どころか、古典的探偵冒険大活劇！そう、ルパンは赤いキツネを喰らい、百円ライターに手を焼く現代人なのに、舞台とストーリーはそうじゃない。事実、作中に登場する〈今日の新聞の切抜き〉の日付は一九六八年九月十二日…。

漫画映画を展開するには、今の世は余りに殺伐としているかもしれん。しかし、古き血の影から開放されるクラリスに比べ、決して浄化され得ぬ男、ルパンは、余りにも寂しい。純粋培養の無垢な彼女を連れて行くこともできず。精いっぱいの額へのキスは、己を保護者の立場に置くことの哀しい意表。それによって彼女はルパンにさよならを言えたのだが、六〇年代のアルプスの野に夢を残して、去り行くルパンの行く手には、人々のざわめく雑踏と、今この世の街並があるばかりである。

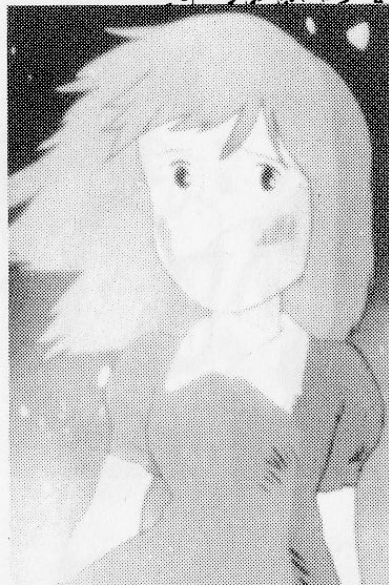
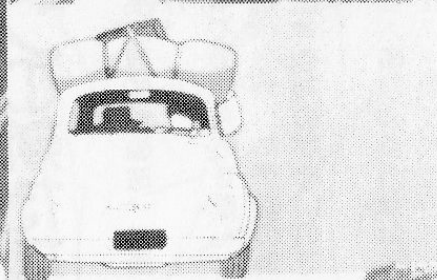
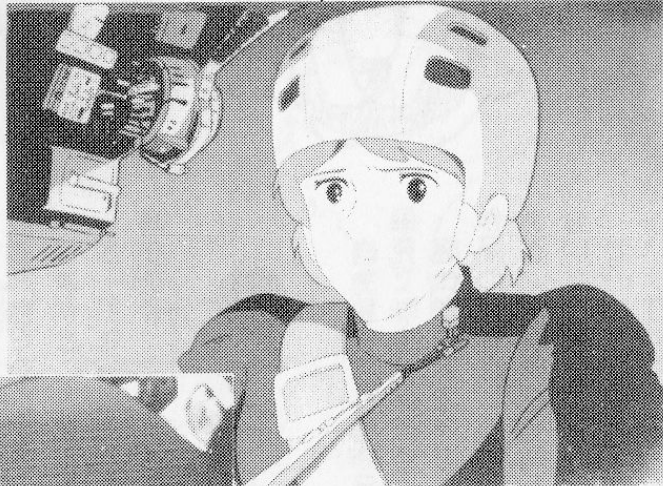
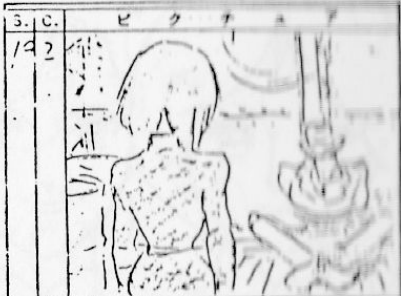
今ルパンを描くことは、宮崎の本意ではないとのこと。

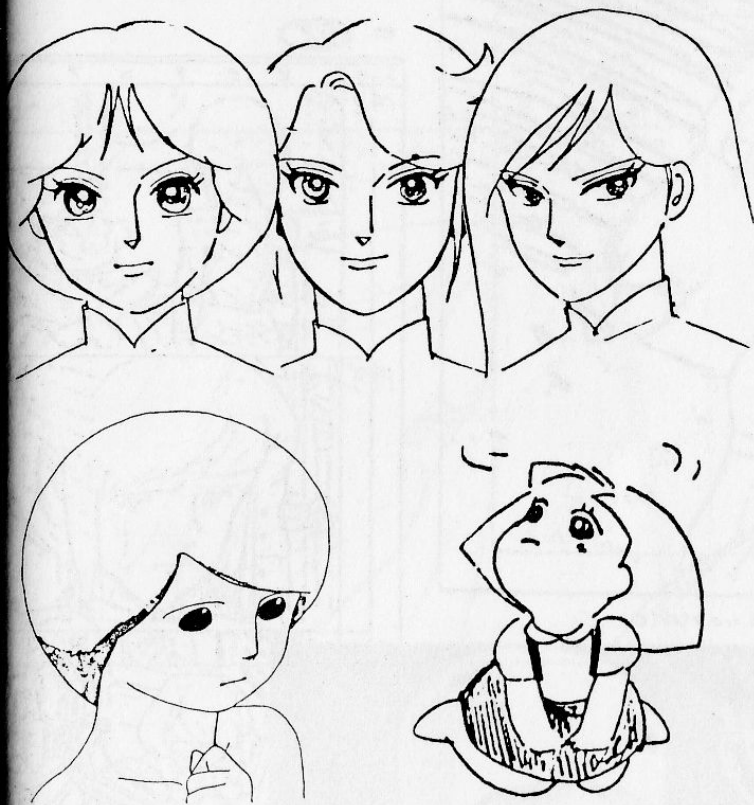
活劇に次ぐ活劇、ヒコーキファン感涙、ショートカットの不二子チャンも勇ましい、TV版新シリーズ第153話「死の翼アルバトロス」は、そんな彼が描かされた一編か。次作と共に照木務名義になっている。壮絶なるギガント落しの再演。面白い一編には違いなかろうが、ルパン達にはまるで生気が感じられない。

そう、昭和元禄の太平楽な平和の中で生まれ生きたルパンが、今の世、役人は裏で何をやっとるか解らず、財界は不気味で、人々はいつ崩れるかもしれん薄氷の上の平和、繁栄を意識しつつ、しかもそれになんら積極的な行動をとらずに生きている、ドロドロした平和の時代に、適応できる筈もない。そして身の内に秘めた生への真剣な想いが、それを看過できる筈がない。

新ルパン最終話「ドロボーは平和を愛す」（原題）は、そのルパンの怒りの爆発だ。

巨大な怪物と化した現代社会に、時代遅れの己の身とロボット（一九四一年のスーパーマンに登場）で立ち向い、己の夢を救い出す！そう、ルパン（宮崎に）にとって、少女の形で現われる純粋無垢な存在こそが、夢であり、憧れであり、己の心のように守り抜かねばならぬ〈何か〉なのだ。（それは彼等の浄化願望故でもある。）

ともあれ、時代の魔の手から己の夢を守り

抜き、新ルパンというニセモノを葬り去った時ルパンの仕事は終った。ルパン達は去る。今見る術もない澄みきった富士の山裾へ。暗示される過去、彼等の生きた日本へと・・・。

宮崎は今「夢の国のリトル・ニモ」を手がけている。ニモの夢の旅が、どう現実の生活にフィードバックされるのか興味深い所だ。

●ファンの新たなる見直し／政岡憲三

さて今、狂乱アニメブーム。しかし一部でそれを静観し、コマーシャリズムにかかわらず、秀れた作品に正統な評価を加え、あるいは自らの手で作品を生み出そうという動きが盛んだ。アニドウほか、ブーム以前からの本格的なサークルが火付け役で、政岡憲三の作品もそのおかげで知られるようになってきた。彼は直接日本の動画界の礎を築いた先人であり、大物である。

代表作としては昭和18年「くもとちゅうりっぷ」21年「桜」22年「すて猫トラちゃん」等がある。実のところ政岡作品はこの三本しか見とらんのだが、作品を云々言うことはできん。ホレてしまったのだ！美しく、しかも全くたるんだ所のないフルアニメ、女性に漂うほのかな動のエロチシズム。全編に溢れる詩情と優しさ。思うに総合芸術としてのアニメーションで政岡作品を凌ぐものは現れ得るのだろうか？ 現在新作「人魚姫の冠」を製作中と聞く。政岡作品は政岡にしか越えられぬのかもしれん。あァ、あまりに芸術性が強過ぎてオクラになったという「桜」の蝶々の女の子の愛らしさよ！う～、蝶々ちゃ～～ん。

●ファンの新たなる動き／自主アニメ

自主製作される作品は数知れぬ故、独断と偏見で学生作品を紹介。

現在学生アニメの中での思想性を重んじる作品の傾向として、現代社会への不安の叫び、あるいは警鐘たらんとするものが多いのではないかと思う。

その中で中央大アニメ研による15分の大作「ハナコの夢」の存在は注視すべきだろう。えんえんと続くハナコしか歩めぬ赤い道、同行する様々な者達、行く手に待つ世界の謎。内宇宙に様々な思いが被さる。多重構造の〈成長〉の物語。この作品をもって、不安と模索の八〇年代に、前作の重い不安の中から中大アニ研は、新しい、そして確かな一歩を踏み出したのだ。「ハナコの夢」の少年版が、同じ中大アニ研内の個人作品「習作その1」と見る事もできる。（すっごく可愛い娘が出てくんの♡）

中大アニ研の次回作は、秋に完成予定の「チャイニーズエンジェル」ハナコの演出者が原作と監督を、習作の製作者が演出を担当する。超娯楽作品とのこと。キャラクターが美人揃いなだけじゃなく、個人的にも期待の作品。（尚、筆者は中大生ではありません。くれぐれも誤解なきように・・・）

テレビアニメの申し子――杉野昭夫

戦後日本のアニメーションは、初期の頃からすでに大部分は、動きにおいて実写を目指していた。
ところが、昭和38年虫プロに初まるTVアニメーションは、それに一大転機をもたらす。
当時の製作能力からして、すでにフルアニメにすることは不可能だった。
動きをおさえたこれらのアニメーションを、当時は自嘲がてら、電気紙芝団とさえよんだ。しかし、TVアニメーションはその起源がそもそも劇場用と違うのだと考える方が正しい。映画であること、つまり実写を目指したフルアニメに対して、TVは児童漫画と並立するものとして始まったのだ。
TVアニメを始めた虫プロの評価が東映動画に匹敵するものである事を否定することはできない。
実際、虫プロには多くの漫画家がいた。しかしアニメーションの魅力が〈動く〉ことである以上、TVアニメの目的は決して漫画をそのまま映像化することではなかった。ただ、動かせないということで、動かす必要のない事を目指しはした。
逆にいうと、本当に動かしたいのはどこなのかを以前にも増して探すようになった。そして必要な場面に、劇場用よりもより動きをアピールする動きを持ってきた。
それは成功すれば劇場用にまさるとも劣らぬ効果をおよぼし、キャラクターを生かすことができた。
逆にいうと、本当に動かしたいのはどこなのかを以前にも増して探すようになった。そして必要な場面に、より動きをアピールする動きを持ってきた。それは成功すれば以前にの劣らぬ効果をおよぼし、キャラクターを生かすことができた。
杉野昭夫の製作した「劇場用・エースをねらえ!」の評価はまさにこれを証明するものであった。
エースのキャラクターは、もちろん原作者の山本鈴美香のものでり、アニメでもそのまま流用している。しかしあの短い時間で原作を見事消化し、的確にキャラクターの確立に成功している。
杉野昭夫オリジナルデザインによる「家なき子」もエース同様高い評価をうけている。
TV版ではリーズという口のきけない少女がいる。原作に出てくるのかどうか読んでないので判らないが、いいキャラクターだ。
口がきけない分、体で話しをす

る。その精一杯さがよい。しかしアニメーターはつらかったろうに。
それからもう一つの名作路線「宝島」東映の作品に対して、こちらは男の世界とばかり、女は陸に残っていたが、リリーという少女もその一人、おかげでどんな性格かは解らずじまいだったが、ジムを一途に想っていたのは確からしい。小さいときは丸かった鼻も、大きくなると立派になっていた。
以上、杉野昭夫が出崎統と組んだ作品中三作ピックアップしたが「マルコポーロ」も美少女がたくさん出ることで名高い。しかしこの人の美少女は、作品との関係であまりかわいくないようだが、ヒロミやマキを見ると、本人は決して嫌いではないようだ。だから、ああいう感じが見たい人には「ユニコ」をお推めします。チャオは仔猫が人に、まさにそんなキャラクターですから。

（BY・いわもと）

●ゲストキャラが光る・荒木伸吾——

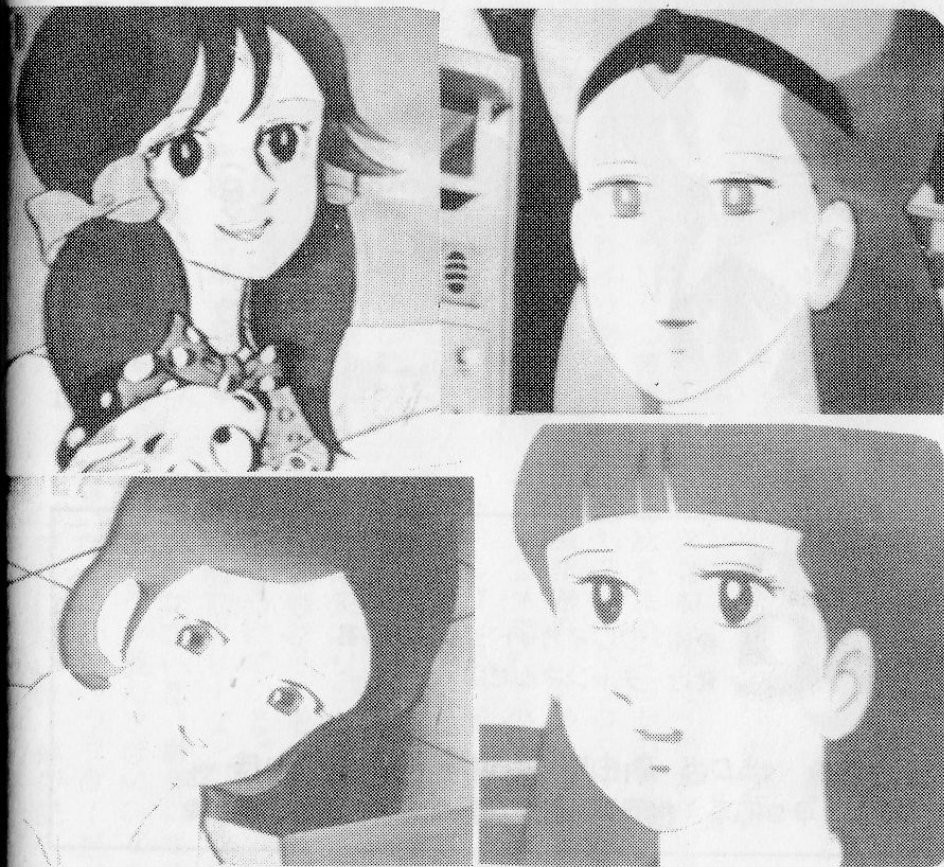
でも所詮は顔だけ。

さて今までとりあげてきたものは、いずれも一人の演出家、一人の作画家による作品だった。キャラクターを生かそうとするなら、これは理想的な形である。

しかしTVアニメにはその他にも、同じく連続モノでありながらCD（チーフディレクター）または総監督を置いて、名話に担当演出をおくタイプのものと、一話一話が離れてシリーズ化しているもの（いわゆる串ダンゴ形式）とがある。

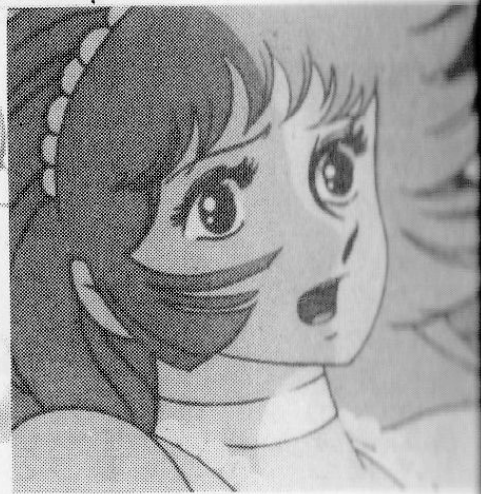
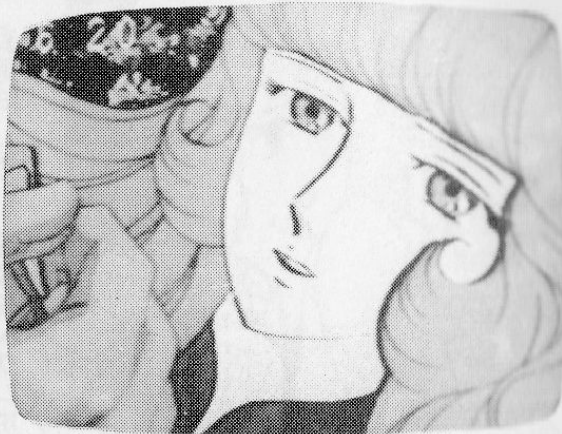
前者においては、演出家によってキャラクターのとり扱いが違うため、CDがいてもかなり入念な打合わせがなければ成功は難かしい。

後者に至っては、主人公は統一されることもあるが前者に比べるとさらにあいまいになる。

だからこの手の作品の主人公に

は、婚約者が何人もいたり、昔のゲストキャラクターの事はほとんど思い出さないといった手合いも現われる。

また、時にはゲストキャラクターの方が人気があるといった事さえある。ま、主人公は一種の狂言まわしの場合も多いということだ。しかし、30分でキャラクターを描ききる事は難かしく、ゲストキャラクターもかなりパターン化してしまうようだ。

ともかくそういった中での荒木伸吾デザインのキャラクターを見て行こう。

まず「バビル二世」前2クールでは由美子、後1クールではユキという少女が出てくる。二人とも実によく似ている。これよりも口デムの方が美人でよろしい。普通黒ヒョウで男の声なのが妙だが、人間になる時はたいてい女になる。

以前は光一を模しているからだとの説が有力だったが真実は知らない。

そして「魔女っ子メグちゃん」かわいいメグと美人のノンが出る。魔女っ子シリーズにもう一つのパターンを持ち込んだ作品だ。「キューティハニー」はもう少し前の作品で、時間帯の関係もあってか、かなりセクシーなキャラクターだった。

「グレンダイザー」にはルビーナ、ナイーダ、キリカという三人の人気キャラが出る。しかし前の二人のストーリーは全く同じといっても過言ではあるまい。特記すべきは、この時点で彼のデザインが変ったことである。推測だが、これはアシスタントの姫野美智の影響と思われる。

後に、マリア、ひかるが出るがこの二人はレギュラー。(ひかるは小松原一男のデザイン)

ゲストキャラの数は話数からいってもかなり多いが、あと二人、兄想いのみどりという少女をあげておこう。祭りの夜、ひょっとこの面を持っていた少女である。

(BY・いわもと)

●悲しき求道者・富野喜幸――

それにしてもガンダムは暗い、暗すぎるんだァ。

アニメブームの中で忘れちゃならんのが、メジャーだけど、あのガンダムの富野喜幸。

富野が初めて作品全体を構成したのが時代転期の中の「海のトリトンであり、主人公をヒーローではなく、またサブも同様に感性を持った一個の人間として描くその姿勢は、後の「無敵超人ザンボット3」「無敵鋼人ダイターン3」「機動戦士ガンダム」「伝説巨神イデオン」に至るまで、徹底して貫かれている。

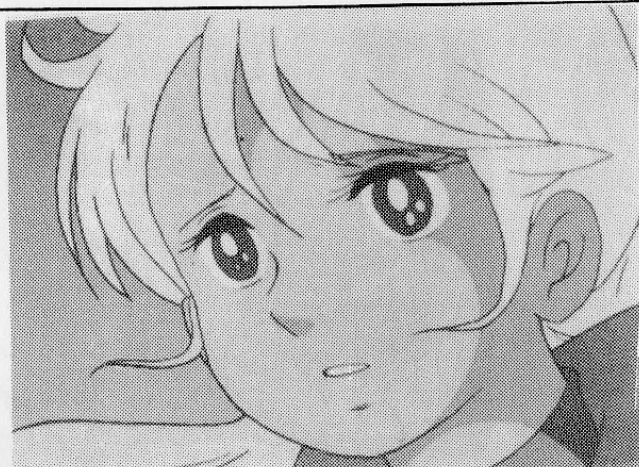
しかし、富野の作品は暗い。トリトンこそ最終話、彼の行動の拠としてきた、正義と悪の明確な害の概念を根底から崩されたものの、その中から大きく成長した〈大人〉として旅立つ事ができたが、他の作品は皆異様に暗い。トリトン的ラストを迎えるザンボットにしても、そのラストだけが作品中唯一の〈救い〉であり、ギャグものととられがちであったダイターン3も実は人間の心の澱の交錯が主要ストーリーを構成していたのであり、最終話はそれをぶつける対象を失なった万丈が、己の心の澱を直視する悲劇である。

富野は言う「ぼくは赤毛のアンにせまろうとして赤毛のアンと同じ演出論でガンダムをやったんです。当面はあの高畑勲さんと肩を並べたい。上に行きたいというんで必死になってるんです。」（奇想天外のインタビューに答えて）

富野はハイジ、三千里の一部絵コンテを手がけており、ザンボット以来その影響を受けたという事か。

高畑の人間を描くリアルな眼が何故富野の場合、暗い方向へと向うのだろう。アロムの守るべきもののない戦いは、連邦軍の良き兵士という戦争の道具から彼を脱脚させることはない。ソロシップはなにものかを求めるでもない〈逃亡〉の旅を続け、人類とバップクランはついに種として和合する事はない。

人の方法論を借りた悲しさ、リアルに人間を描く事に溺れ、人が生きる事の根元を忘れてるんだと見るむきもある。

あの人が暗い作品ばっか作るのはネ、過去にすっごく暗い原体験があるせいでさ、頭があんな禿た

●原稿上げた開放感に侵りつつカリオストロ見てきたんだけどネ、己の夢を守る事はできても決して抱き締める事のできんルパンってのが、なんだか今に生きる僕等とダブッてきちゃって涙出てきちゃって･･･馬鹿だネホントに！（T）

●美少女キャラということで、東映動画、杉野、荒木キャラを担当しましたが、各キャラクターに適用して見せる場を作れず、はなはだ不親切な内容となってしまいました。また、荒木キャラについては演出家がバラバラな事もあってキャラクターを把握できぬまま文章化してしまい、他のファンの方々の失笑をかいそうですナア･･･。（I）

●岩本君にはキャラクター中心に、富田君には作品中心に書いてもらった「アニメ美少女年代記」いかがでした。取りあげたものが僕等の趣味そのものになってしまったけど、これも商業主義に毒されないミニコミのヨイところ、自由にやらせてもらいました。このところ教習所の教官にいじめられ、レポートに追われ、体力を消もうしてしまい、次号ではちょっとお休みですが、7号では、**ネコ**大特集をやりますからネ！チビ猫、小鉄、シャンキャット、ヒデヨシ･･･いまや**ネコ**が主役の時代がやってきた!(S)

●ワーワー！なんだこれは!! 4号の予告とまるでちがうじゃないの！ 杉浦ファンの方ごめんなさい先生の原稿はとっくに入ってるのだけど、ちょっとしたトラブルで･･･先にアニメ美少女の方ができてしまった･･･。それにしてもヒルダは救われたのだろうか、救われなかったんだろーか???（F）

のもそれやなんだヨ、なんて冗談までである。
しかし、人類が真に理解し合うには新たな人類、ニュータイプにならにャアカン、とか、人々が憎しみ合わぬ世界は輪廻転生のその彼方の･･･なんて、人間不信としか思えん事やられるとその冗談だって信じたくもなるじゃないのサ。
理由はどうあれこのままじゃ、心の淵に埋もれるばかりで、ハイジの様な、三千里の様な、そして太陽の王子の様な幕切れは、永久に迎えられんような気がするんだよね。
（BY・とみた）

6号予告

こんどこそ信じて欲しい信じたい
12月頃発行です

ファン待望の描下し！
杉浦茂漫画劇場

☆ニューウエーブ10派50人のマンガ家たち
☆コボタン物語は
萩尾望都・竹宮恵子

7号予定
ネコ・にやんこ大特集

今やネコが主役の時代がやってきた！
あなたの好きなネコをおしえて下さい

横山光輝の作家性と初期作品

中路秀夫

横山光輝は、昭和30年デビュー以来「鉄人28号」「おてんば天使」「伊賀の影丸」等の大ヒットをとばし、昭和40年前後における児童漫画家の新旧交替期も「魔法使いサリー」「バビル二世」「水滸伝」等安定した力量でのりきり、現在は青年誌にも進出すると共に「三国史」（コミックトム連載）という中国史劇をライフワークとして精力的に描きついでいる息の長い人気作家である。

最近、手塚治虫を初めとして全集の刊行等旧作の再評価が盛んであるが、横山光輝に目を移してみると、人気や長い実績にもかかわらず、初期作品の復刻版（桃源社・中野書店）以外には「鉄人28号」（大都社）があるにすぎない。このように横山光輝の作品の再評価が遅れている要因について考察してみると、横山光輝の作家性とその作品傾向にあらわれていると思われる。

横山光輝の代表作「鉄人28号」や「伊賀の影丸」等を読んでみると、冒頭からほとんど抵抗なくしかも速いテンポで作品世界にひきずり込まれ「ああ面白かった」と本を閉じるであろう。実はここに作者の計算された意図がある。作家が読者をスムーズに作品世界にひき込み満足して読了させるためには、読者の思考する余地を与えないスピード感と娯楽性が要求される。そこには複雑なストーリーや作家の思想、主義主張は必要なく、徹底的なサービスと速くかつ快いテンポが必要である。ここに横山光輝の創作上の姿勢があり、この娯楽性とスピード性が彼の作家性ということができよう。

ここで横山光輝がその作家性にたちいたったおいたちについて、のぞいてみるのも興味深いものである。横山光輝は、中学生時代から図書館や貸本屋に通い、小説や講談本を好んで読んだらしい。中でも吉川英治作品には、その波乱万丈の物語展開に魅力を感じ、むさぼるように読んだという。又、高校卒業後は銀行に勤めたが四ケ月後に退職し、家でぶらぶらしていた頃、近所の貸本屋に通い店の本をほとんど読みつくした。その後映画会社の宣伝部に勤める間、内外の映画約五百本を見たそうである。こうした小説や映画が、後の横山光輝の作品における計算された娯楽性とスピード性のバックボーンになったことは容易に想像がつく。ちなみに、娯楽主義に徹したもう一人の作家に「矢車剣之助」「天馬天平」の堀江卓がいる。彼も又、映画館の支配人出身であることは興味ある事実である。

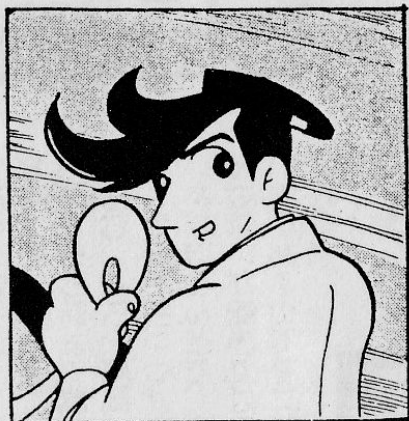
娯楽主義に徹することこそ少年漫画の大きな目的ではあるが横山作品には、なるほど読後感（感動、情感、余韻、思想）を感ずることが少ない。このような、あとに残らない漫画、ということが作者の意図するしないにかかわらず横山作品の長所でもあり短所でもある。つまり横山光輝こそ消耗品（読み捨て文化）であった児童漫画の代表作家であり、このことが人気作家にもかかわらず、横山光輝の旧作の再評価を遅らせた要因である。

しかし、現代の劇画が真実性と社会性を追求する中で、次第に漫画本来の夢を失いつつある現在、横山作品がその単純明解なストーリーと上品な絵柄、そして魅力ある主人公で、特に若い世代に人気があるのはむしろ当然なことかもしれない。「鉄人28号」（秋田書店）や「伊賀の影丸」（同）が約10年間版を重ねているのもその現れであろう。

ともかく、横山光輝にはその長い実績から、まだまだ再評価されてしかるべき多数の作品がある。「レッドマスク」「風の天兵」「一ばん星の歌」「くれない頭巾」「少年ロケット部隊」等はその中心となろうが、特にデビュー作「音無しの剣」を含む初期作品は、その後の横山作品の原形をなすもので、今回は初期の東光堂刊三作を紹介してみよう。

●音無しの剣

B6判上製128ページ130円。昭和30年3月刊（新作漫画双書）

辻斬りに襲われたことから一撃で相手をたおす音無しの剣を開眼

した少年剣士高柳又四郎の物語。

東光堂新作漫画双書として出版された横山光輝のデビュー作である。横山光輝は昭和28年神戸の高校を卒業後、神戸銀行に勤めたが、同年7月退職、その後映画会社の宣伝部に勤めながらコツコツと漫画を描きためた。東浦美津夫の紹介で原稿を大阪の東光堂に持ち込み採用されたのが「音無しの剣」であった。東光堂はすでに手塚治虫の初期作品を多数出版して、実績のある会社である。

「音無しの剣」の絵は未だその個性が確立されていないが、構成には新人らしからぬ計算されたうまさが感じられる。軽快なコマ運び、適度なギャグと単純なストーリー、単純であるが故に読者を作品世界にひき込めるわけである。

なお本書の初版の表紙は他人の筆になるものであるが、再版（漫画光文庫）では横山光輝が描いている。

●白百合物語

B6判上製128ページ130円。昭和30年刊（新作漫画双書）

母を喜こばせようと音楽会への出場を決意する貧しい少女幸子、昔家出した兄の健次はかげながら幸子を見守るのだった。

デビュー二作目で最初の少女漫画である。「音無しの剣」の絵と比較すると一層洗練され、すでに横山の画風が定着しつつある。ストーリーは当時の少女漫画の傾向である、薄幸の少女が幸福をつかむまでの過程が描かれているが、そこには新鮮な絵柄と相まって暗さは感じられない。この作品は、その後の「一ばん星の歌」「おてんば天使」等横山少女漫画に連なる原形をなしている。

一部に「白百合行進曲」をデビュー作とする説があるが、横山のデビュー作は「音無しの剣」であり、本作品と次に述べる「魔剣裂剣」の好評により光文社の「少女」から連載を依頼されたのが「白百合物語を改稿した「白百合行進曲」である。横山光輝は、この「白百合物語」のテーマに愛着を持っているためか、後に「躍ろうユリ」（りぼん付録）も同テーマで発表している。

なお本書の再版（漫画光文庫）は「白百合日記」と改題し表紙も新たに描きかえ、初版にあった前書きをカットしている。

●魔剣烈剣

正続全二巻、各B6判上製128ページ130円。昭和30年（新作漫画双書）

作者の第三作目である。オーソドックスな時代劇「音無しの剣」から一転して忍者漫画に挑戦した初期の代表作ともいうべき力作である。横山はこの作品で二点の試みをくわだてている。すなわち、従来の非科学的な忍術漫画ではなく、忍者自身の超人的な行動と火薬玉や鎖鎌といった武器を使用させることで新しい忍者漫画を開拓すること、次に本作品の主人公は、一応越中富山之守に斬り殺された天下の刀士白雪の娘早百合においているが実は、白竜党と山彦族という忍者の集団にある。これは、作者のあとがきからよく理解できるが従来の漫画の主人公は個人であるという常識を破った新しい試みといえよう。これを発展させたのが、後の「風の天兵」であり、「伊賀の影丸」である。

横山光輝は、この「魔剣烈剣」の好評により雑誌界に転じ「少女」の「白百合行進曲」の連載となる。その後「少年クラブ」の「仮面の冒険児」（手塚治虫原作）「少年」の「黄金都市」（手塚治虫原作）「豪勇為朝」「竜車の剣」「白竜剣士」といった腕だめしの後「鉄人28号」の長期連載により、児童漫画界の第一人者にかけのぼっていった。

（注）本論では、横山光輝のデビュー作は「音無しの剣」としている。しかし、すでに昭和29年、雑誌「探偵王」に短編を発表しており、真のデビュー作とするには疑問がある。御存知の方がおられましたら御教示をお願いします。

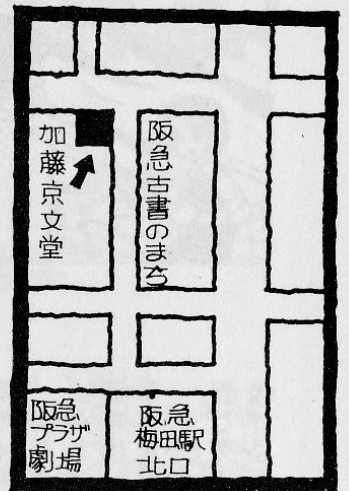
MANGA 古書店ガイド

加藤京文堂

大阪市北区芝田一丁目阪急古書のまち
☎(06)三七三ー一二五一
11時から8時まで営業。水曜休み。
B6、A5、雑誌、付録などあくまでも手塚治虫中心。めずらしい本、高い本がほとんどで、安いコミックスなどはないが関西ではここでしか拝めない本があるのでマニアがよくオマイリに行く。

泰誠館

目黒区八雲一ー一二ー二
☎(03)七二三ー〇二一一
2時から10時半まで営業。無休。
マンガ専門店ではないがめずらしいマンガもかなりおいてある。なによりも、店主の趣味が値段のつけかたなどにどぎつく反映してるところがおもしろいのです。

泰誠館
目黒通り
都立大学
東横線 至渋谷
都立大学→

松本零士の『蜜蜂の冒険』はスゴイ

「日本名作漫画館」の第一期第二部に入ってる松本零士の「蜜蜂の冒険」はスゴイ！なにしろ昔々松本さんが手描きした原稿を自分で製本したこの世でたった一冊しかなかった本なのだ。こりゃもう復刻本なんて言えない。松本ファンなら買うしかない！！！この他に杉浦茂の「円盤Z」等5冊で一八、八〇〇円。
★中野区松が丘一ー一二 名著刊行会

『紫の伝説』がいよいよ単行本に

ファンにとって待望久しかった古川益三氏の大長編「紫の伝説」がいよいよ青林堂から単行本化されるらしい（しかし青林堂がなにやらあぶないらしーので楽観はできない）SF世界から内面世界へと回帰していくあの壮大な作品がよみがえるのはうれしい。
古川先生は趣味で、マンダラケという古本屋（マンガ専門）をやっておられるので、ここに行けばサイン入が買える訳だ。☎三八五ー六四五九

●ロリコン・ライブラリー①
大快楽の谷口敬に注目

三流劇画誌の御三家のうち劇画アリスは休刊（復刊のうわさもあるけど）エロジェニカは倒産、ただ一つ残った漫画大快楽はケンカ相手がいなくなったせいか今ひとつ活気がない。三流劇画の熱気っていったい何だったんだろーね。そんな中で、大快楽に一ケ月おきに描いてる谷口敬が、ただ一人光をはなっている。あどけない少女達の心身の交流（なんのこっちゃ?）を、さわやかなタッチで描いた好編を毎回発表していて、これ程スナオに少女の心を描ける作家は、少女マンガ界にだっていないんじゃないかしら。
かつては高取英編集のエロジェニカで野島みちのりの名前で描いてた時に比べて、暗さがなくなってシャープさが出てきた。（かつてのぱふや、楽書館で描く時は木村三三夫）
これだけの人だからいずれはメジャー誌からもお声がかかるとは思うけど、御本人も「ぼくは描くのが遅くて…」と言っておられるし、あまり乱作して欲しくないですネ。
ちなみにこの人の描くセーラー服は実にユニーク、ロリコンは必見！

大快楽7月号の"ユモレスク"は知恵ちゃんシリーズの第2弾 本人は手ヌキだと おっしゃるけど あの緻密な絵のどこが手ヌキなんか！オセーテ欲しー！

●現代マンガ図書館のマンガ即売展は、10月31日から11月3日までの予定。最終日3日には、みんながあっとおどろくイベントを企画中(?) 御期待下さい！

情報交換コーナー

カット・鈴木信一

探 求本。白土「こがらし剣士」「からすの子」うしお「ちよおちよお交響曲」他。「バットくん」「正チャンの冒険」「砂漠の魔王」「少年王者」「カバ大王」等。今後田川紀久雄、杉浦茂の本に力を入れます。交換本として「おせんち小町」「忍者無双」「続・いちばん星の歌」「大空魔王」「サボテン君」漫画少年（S26/11）ふしぎ旅行記（付録）「山からきた河童」②などあります。よろしく。
662西宮市獅子ケ口町一〇－六　津田毅

探 求本。漫画アクションS42より名号、プレイコミックS43～52、テレビマガジン、劇画アリス、別冊少女コミック、OUT、増刊ランデブー①②、ペケ、アゲイン、ダックス、チッチ愛の絵本「いつかどこかで」マンガ朝日②、鉄腕アトムクラブ各号その他。
八王子市大和田町五－二四－三
パークマンション201山城和巳

探 求本。松本零士の冬眠惑星（プレイコミックS43・9/10）火の森のユーシカ（少女コミックS43増刊）石炭記の午後（S44プレイボーイカスタム）ウエストサイド物語（平凡S44）中年王者（漫画アクションS45増刊）他。及び電光オズマ、スーパー99掲載誌、付録。切抜きも可。
577東大阪市永和二－五－一四　中野幹

水 木しげる「飛び出せピヨン助」「マメ博士の冒険」「ブル探偵長」「墓をほる男」「怪鬼鮮血の目」「鬼太郎夜話」街、影など貸本マンガ多数あり、あなたの本との交換希望。
171豊島区南長崎二－一五－一二
野口荘　川脇康生

探 求本。杉浦茂、花野原芳明、うしおそうじ、馬場のぼる、田川紀久雄の単行本、付録。砂漠の魔王。交換本。緑の天使、海の王子シルバークロス、黒のマガジン、劇画No1、忍法秘話。手塚、横山、武内つなよし、堀江卓、寺田ヒロオ、田中正雄、ちばてつや、等の付録。交換又は譲ります。返信切手同封でリストお送りします。
635奈良県北葛城郡広陵町疋相
浦上多賀吉

探 求本。手塚治虫、ちばてつやの単行本、掲載誌、付録特にカッパコミックス「鉄腕アトム」小学館コミックス「W3」「ジャングル大帝」でブかマガジンれお、同別冊「りぼんの騎士」「ふしぎなメルモ」他、雑誌の別冊も探してます。
511-11三重県桑名郡長島町大倉一－一三四二　矢野元義

探 求本。横山光輝の「音無しの剣」「地獄の犬」「白百合物語」「冒険王付録スリラーブック「闇におどる猫」「あけみちゃん」「鉄人28号」S31/8・9、S32/4・6～9を高価にて購入、交換本も各種あります。
544大阪市生野区新今里
六－八－一二　苅安浩

探 求本。手塚治虫に関するものならなんでも結構です。適価でお譲り下さい。往復〒で連絡を。
663西宮市一里山町七－一〇　芦谷恵一

石 森章太郎の作品でS31～33年の作品にはOP.NO.が付いているのですがOP.6、7、11、12、16、18、19、22、26、29、36の作品名等教えて欲しいのです。できたら作品のコピーも。
浜松市新橋町六三三　福田淳一

探 求本。少年マガジンS39/35・36・44・45、サンデーS41/21～25・30・39、キングS45/16～19。「希望」（東光堂）の発行年次御存知の方教えて下さい。
362上尾市富士見二－一〇－一八　今入重一

探 求本。白土三平「こがらし剣士」「忍者街道」「死神剣士」「からすの子」「死霊」「仇討無惨帳」「大旋風①②」漫画主義①～④。質問です、かつて少年マガジンに水島新司の作品リストが載ったそうですがいつの号か知ってる方教えて！
164中野区中野一－一五－一五
本山様方　深田秀夫

探 求本。「ジャングル大帝」「地球を呑む」（GS）美本を。手塚治虫、横山光輝、松本あきら、水木しげる、藤子不二雄の本も探してます。交換本としては講談社漫画文庫の絶版本「月光仮面」①～⑤「スポーツマン金太郎」①～③等。
992-031山形県東置賜郡高畠町
二井宿一　星章一

探 求本。ぐらこん①②④⑤値段は相談で。往復〒待つ。質問COMコミックスは何冊くらい出たんでしょうか。
123足立区江北三－二四－七
斉藤英夫

●荒木クンの卒業さみしいなあセール（〒570守口市大枝東町47戸田様方　荒木節夫まで。）
五郎の冒険①（虫コミ）、少年同盟②（虫コミ・カバー欠）、マスクマン0②（秋田）、猫目小僧③（キング）
ロック冒険記（GC・カバー欠）、化石島（GC・カバー欠）以上を各200円+送料でお譲りじちゃいます♫

探 求本。S53の少年サンデー28号、別冊ゴロー8/1号、別冊少年サンデー8/25号。高橋留美子FC・研究会について御存知の方御連絡下さい。
531大阪市大淀区中津二-三-八　池田　勤

探 求本。「マッハ三四郎」の単行本、その他マッハ三四郎に関するものなら何でも。最高値で買い受けます。
454名古屋市中川区豊成町一-二-一六一三　三輪研史

弓 月光の連載していたマーガレット（S50〜）捜しています。高価で講入します。特に読み切りの「サインコサイン三角関系」を捜しています。
211川崎市中原区苅宿二六〇　堀田修吾

探 求本。弓月光の初期作品入手不能になった本、発表誌。水木しげる貸本漫画なら何でも。水木しげるのサイン本などとの交換で。
315茨城県新治郡千代田村下稲吉三八二五　谷克　広

探 求本。つのだじろう「おれの太陽」なるべく安価でお願いします。石森章太郎、藤子不二雄の本も探してます。みなさんよろしく。
281千葉市検見川町五-二二三　亀谷新一

探 求本。月刊スーパーマン79/18、少年マガジンコミックスの吾妻ひでお「あしたのジョーク」鏡の①②⑤、ロリータ①、シベール各号、吾妻ひでおに花束を「へろ」高価にて購入します。
173板橋区大谷口上町二九-一　竹内康文

障 害者の出てくるマンガをあつめています。障害の種類は限定しません。コピー可、題名作者等教えていただくだけでも結構です。
155世田谷区北沢一-二-三　加積荘　若林泰志

★若林さんは以前ぱふにも小論が載ったことのある障害者マンガの研究家です。今度聴障者誌「みみより」にも評論が載るとのことです。

●今回は前号の予告を追い越してアニメ美少女年代記が来てしまった…。とっくに原稿を入れて下さってる杉浦先生、渡辺緑さんごめんなさい。コボタン物語も一回お休み、楽しみにしておられた方ごめんなさい。編集長の首がとんだくらいじゃとても許してもらえそーにないので首はとびませんが、小保編集長は現在、完全なるロリコンをめざして三原順子の写真あつめにこってます。ちなみに彼は不運な人で、雑誌の懸賞に一度も当ったことのないばかりか、全員プレゼントにもはずれた(?)暗い過去の持主なのです。みなさん愛の手を！尚、三原順の写真はいらないそーですのであしからず。

●漫金超ろ号が出ております。4号も8月1日発売なので本誌が出る頃にはすでに発売されてるはず、書店でさがしてみて下さい。当事務局へも一冊御寄贈いただき、ありがとうございました。本誌への寄贈本中唯一の一流メジャー商業誌なのです。漫金超えらい！みなさんも漫金超を読みませう。
●最近は企画をとったりとられたりが多くなりましたね。今回のアニメ美少女の企画もウチの編集がうっかりOUTの人に企画をもらしちゃったんだけど、天下のOUTだもん、ウチみたいな弱小ミニコミの企画とったりはしないよね。きっとあれは偶然の一致なのでせう。こんど寄贈本送ってね。

漫画の手帖　5号　昭和56年9月15日発行
企画・編集●三軒茶屋PRESERVATION SOCIETY　編集人●小保誠　発行人●藤本孝人
製作●漫画の手帖事務局　〒167 東京都杉並区上荻2-27-18 藤本孝人 方
STAFF● 赤沢充・荒金正明・川端康生・佐野邦彦・泰忠義・岩本保雄・冨田泰彦
協力●現代マンガ図書館　印刷・製本●株式会社ナール出版印刷
¥150